

甘 楽 条 里 遺 跡

(造石向井・造石大町・造石下町地区)

平成26年度社会資本総合整備事業(活力創出基盤整備)に伴う
埋 蔵 文 化 財 発 掘 調 査 報 告 書



甘 楽 条 里 遺 跡 (造石向井・造石大町・造石下町地区)

平成26年度社会資本総合整備事業(活力創出基盤整備)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

二〇一五

群馬県富岡土木事務所 公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

2015

群 馬 県 富 岡 土 木 事 務 所
公 益 財 団 法 人 群 馬 県 埋 蔵 文 化 財 調 査 事 業 団

甘 楽 条 里 遺 跡

(造石向井・造石大町・造石下町地区)

平成26年度社会資本総合整備事業(活力創出基盤整備)に伴う
埋 蔵 文 化 財 発 掘 調 査 報 告 書

2015

群 馬 県 富 岡 土 木 事 務 所
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

序

本書は、平成26年度社会資本総合整備事業(活力創出基盤整備)一般国道254号吉井バイパスに関わる、甘楽条里遺跡の発掘調査報告書です。国道254号は、関東と長野を結ぶ重要な街道であり、古くから人々が往来して生活を支えてきました。近年、物流の増加に伴う交通量の増加はいちじるしいものがあり、高崎市吉井町、甘楽町、富岡市の各市街地を迂回するバイパスが計画され、すでに供用が開始されています。

このたび報告書として編みました甘楽条里遺跡は、整然と区画された水田跡の遺跡です。古代から人々が営々とコメ作りに励んできた証が今日まで引き継がれてきます。まさしく、歴史の継承と発展そのものでもあります。

これまでに甘楽条里遺跡は、甘楽町教育委員会、甘楽町遺跡調査会、そして当事業団により発掘調査が実施され、多大な成果を納めてきております。

ここに報告いたします甘楽条里遺跡は、甘楽町造石地区での発掘調査成果です。ここでは、江戸時代に浅間山の噴火による災害復旧の溝、水田跡の他、おびただしい数の耕作痕や溝の発見がありました。これらの発掘調査された遺構には、当時の人々の復旧への強い意志と、農作業の労苦などが形として残されました。当時の人々の勤勉さには感慨深いものがあります。

今回の調査成果により、人々がどのような日々を暮らしてきたのか、地域社会の歴史を復元するために資するものと思います。

本報告書の作成にあたっては、群馬県富岡土木事務所、群馬県教育委員会、甘楽町教育委員会、地元関係者の皆様より、ご指導、ご協力を賜りました。これらの皆様に心より感謝の意を表し、序といたします。

平成27年7月

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 中野三智男

例 言

1. 本書は、平成26年度社会資本総合整備事業(活力創出・補正)に伴い発掘調査し、整理作業は、平成26年度社会資本総合整備事業(活力創出基盤整備)に伴って行った甘楽条里遺跡の発掘調査報告書である。
2. 遺跡は、群馬県甘楽郡甘楽町大字造石字向井594-2、594-3、594-4、595-2、595-3、598-1、598-4、599-2、599-3、601-2、605-2、629-3、大字造石字大町367、396-2、397-3、398、399、大字造石字下町630-1、633-3、634、636-2、649-2に所在する。
3. 事業主体 群馬県富岡土木事務所
4. 調査主体 公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
5. 発掘調査の期間と体制は次のとおりである。
履行期間 平成26年9月1日～平成26年12月31日
調査期間 平成26年10月1日～平成26年10月31日
調査面積 1564㎡ 調査担当 菊池 実(上席専門員)、小野 隆(主任調査研究員)
遺跡掘削工事請負 (有)毛野考古学研究所 地上測量委託 アコン測量設計株式会社
6. 整理事業の期間と体制は次のとおりである。
履行期間 平成27年3月31日～平成27年7月31日
整理期間 平成27年4月1日～平成27年5月31日 整理担当 飛田野正佳(専門調査役)
7. 本書作成担当は次のとおりである。
編集および本文執筆：飛田野正佳 遺物写真撮影：飛田野正佳
遺物観察：神谷佳明(専門調査役) デジタル編集：齊田智彦(主任調査研究員)
8. 出土遺物および写真・図面等記録類は、群馬県埋蔵文化財調査センターに保管している。
9. 発掘調査および報告書作成には、次の関係機関にご助言をいただき、記して感謝いたします。
群馬県教育委員会 甘楽町教育委員会 富岡市教育委員会

凡 例

1. 本報告書に用いた遺構名称は、発掘調査時の名称を踏襲した。
2. 本報告書に用いた座標・方位は付図を除きすべて国家座標「世界測地系(日本測地系2000平面直角座標第IX系)」による。座標北と真北との偏差は $X = 29150$ 、 $Y = -79750$ で $+0^{\circ} 31' 29.75''$ である。
3. 本報告書の遺構図版縮尺は以下の通り。ただし、遺構によってはこの限りではない。
遺構平面図：溝、耕作痕、水田面 1/40、復旧溝1/80 遺構断面図：すべて平面図と同じ。
4. 本報告書の遺物図版縮尺は 1/3 である。遺物写真の縮尺は 2/3 である。
5. 本報告書中の遺構断面図の標高値は、原則として断面図に「L = ○○m」のように表記した。
6. 本報告書における土層断面図及び遺物観察表に記した色調表現は、農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所色票監修1998『新版標準土色帖』によった。
7. 本報告書におけるテフラ(火山噴出物)の略号は以下の通り(テフラの名称は町田洋・新井房夫1992『火山灰アトラス』東京大学出版会による)。
As-A…浅間A軽石、As-B…浅間B軽石、As-C…浅間C軽石、AT…始良Tn火山灰

目次

序

例言・凡例

目次

挿図目次 表目次 写真図版目次 付図

第1章 発掘調査と遺跡の概要

1	調査に至る経緯と経過	1
2	調査の経過と方法	2
3	整理作業の経過と方法	2
4	遺跡の位置と地形	3
5	これまでの遺跡地の調査	5
6	周辺の遺跡	10
7	遺跡の基本層序	19

第2章 検出された遺構と遺物

1	調査の概要	20
2	災害復旧溝	22
3	溝	22
4	耕作痕	22
5	水田面・畦畔	24
6	出土遺物	25
7	まとめ(調査の成果)	25
	注および引用参考文献	27

挿図目次・表目次

第1図	甘楽条里遺跡と周辺の地勢(国土地理院地勢図「長野」平成18年11月1日発行20万分の1「宇都宮」平成18年4月1日発行20万分の1)	1
第2図	甘楽条里遺跡本調査区位置図	2
第3図	遺跡周辺の地形(「黒熊中西遺跡」1992 第3図に加筆・一部訂正)	3
第4図	甘楽条里の旧地形(「甘楽条里遺跡(大山前地区)」2000 第44図に加筆)	4
第5図	甘楽条里遺跡の発掘調査区	7
第6図	甘楽条里遺跡(造石大町地区)と本遺跡位置図	9
第7図	周辺の遺跡(国土地理院地形図「富岡」平成7年4月18日発行5万分の1「高崎」平成10年12月1日発行5万分の1と群馬県教育委員会事務局文化財保護課のマッピングくんまを使用)	12・13

第8図	基本土層柱状図	19
第9図	1～3区配置図と1区全体図	20
第10図	2・3区全体図	21
第11図	1号復旧溝と出土遺物	22
第12図	1号溝	22
第13図	1～5号耕作痕	23
第14図	水田面と出土遺物(上)と畦畔(下)	24
第1表	周辺遺跡一覧表	18
第2表	遺物観察表	25

写真図版目次

P.L. 1	1	1区調査前風景(東から)	2	2区水田面出土遺物4(南から)	
	2	1区全景(東から)	3	2区水田面出土遺物2(南から)	
P.L. 2	1	1区確認面(東から)	4	2区水田面中央部確認面(東から)	
	2	1区確認面東側(東から)	5	2区水田面西端確認面(南東から)	
	3	1区確認面東側(南から)	6	2区水田面中央部確認面(南東から)	
	4	1区中央部トレンチ南半分(東から)	7	2区水田面中央部確認面(南東から)	
	5	1区中央部トレンチ全景(北から)	P.L. 8	1	1区1号耕作痕全景(南から)
P.L. 3	1	1区中央部トレンチ北半分(東から)	2	1区1号耕作痕断面(南から)	
	2	1区西端部トレンチ(南から)	3	1区1号耕作痕近景1(南から)	
	3	1区西端部トレンチ(南から)	4	1区1号耕作痕近景2(南から)	
	4	1区西端部トレンチ(南から)	5	1区2号耕作痕断面(南から)	
	5	2区調査区全景(東から)	P.L. 9	1	1区2号耕作痕全景(南から)
P.L. 4	1	2区調査区東半分(東から)	2	1区2号耕作痕近景1(南から)	
	2	2区調査区西半分全景(東から)	3	1区2号耕作痕近景2(北から)	
	3	2区調査区全景(東から)	4	2区3号耕作痕断面(南から)	
	4	2区調査区西半分(東から)	5	2区3号耕作痕近景1(南から)	
	5	3区調査区全景(西から)	P.L. 10	1	2区3号耕作痕全景(南から)
P.L. 5	1	3区1トレンチ調査状況全景(西から)	2	2区3号耕作痕近景2(北から)	
	2	3区2トレンチ調査状況(西から)	3	2区4号耕作痕断面(北から)	
	3	1区1号溝全景(南から)	4	2区4号耕作痕近景1(南から)	
	4	1区1号溝全景(南西から)	5	2区4号耕作痕近景2(南から)	
	5	1区1号溝断面(南から)	P.L. 11	1	2区4号耕作痕全景(南から)
	6	1区1号溝東半分断面(南から)	2	3区5号耕作痕全景(西から)	
	7	2区1号復旧溝全景(東から)	3	3区5号耕作痕中央部(西から)	
P.L. 6	1	2区1号復旧溝西部分(南東から)	4	3区5号耕作痕近景(西から)	
	2	2区1号復旧溝(東から)	P.L. 12	1	1区調査開始風景(西から)
	3	2区1号復旧溝確認面(東から)	2	1区1号溝測量風景(西から)	
	4	2区1号復旧溝検出面(北東から)	3	1区水田面調査風景(北東から)	
	5	2区1号復旧溝断面(南東から)	4	2区耕作痕調査風景(南から)	
P.L. 7	1	2区水田面遺物出土状態(東から)		2区1号復旧溝、水田面、遺構外出土遺物	

第1章 発掘調査と遺跡の概要

1 調査に至る経緯と経過

国道254号は、関東地方と長野県を結ぶ古くからの幹線道路で、群馬県の西毛地域にとっても、主要な幹線道路として重要な役割を担っている。近年、物流の増加や人々の生活の多様化による交通量の増加は、しばし渋滞を引き起こし、その緩和が求められるところであった。そのため、高崎市吉井町、甘楽町、富岡市の市街地を迂回する国道254号バイパスが建設され、現在共用されるに至っている。

本事業は、このバイパスを2車線から4車線に拡幅するためのものである。本事業地が周知の甘楽条里遺跡地内であることから、群馬県教育委員会事務局文化財保護課が埋蔵文化財の試掘・確認調査を平成26年7月に実施することになった。試掘・確認調査の結果、事業地の東半部でAs-B混土層下から畑等の遺構が確認された。

このため、富岡土木事務所と文化財保護課の協議を経て、平成26年10月1日～同年11月30日にかけて、公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が発掘調査するに至った。



第1図 甘楽条里遺跡と周辺の地勢(国土地理院地勢図「長野」平成18年11月1日発行20万分の1「宇都宮」平成18年4月1日発行20万分の1)

2 調査の経過と方法

本事業の調査対象地は、甘楽条里遺跡の条里地割りが残る区域で、甘楽町大字造石字向井594番2他、同大字造石字大町367番他、同大字造石字下町630番1他に所在する。調査は、世界測地系の国家座標を基本として実施した。本調査区の北側は、国道254号バイパスが並行して走り、調査区の長さは東西340m、幅10mを計る。本調査区は、本事業団が平成18年に発掘調査した甘楽条里遺跡(造石大町地区)の南辺部にあたり、道路を隔てて隣接している。

調査開始の10月当初に、旧町道部分の舗装を除去した上で、改めてトレンチを数本設定し、下面の遺構残存状況の確認をおこなった。旧町道の下部は、現表土下40cm程度にAs-B軽石層が残存する見込みであったが、道路路盤工事の掘削は想像以上に及んでおり、旧町道下は全範囲にわたって攪乱が及んでいると判断した。その結果、調査範囲を旧町道部分を除いて設定し、調査範囲を当初計画より縮小することとし、調査期間も1ヶ月に短縮することになった。

調査に際し、調査区を南北に縦断する水路と農道を調査区境として調査区を分けた。調査区西端から水路までを1区、水路から農道までを2区、農道から調査区東端までを3区とした。

調査面は、試掘調査やトレンチ掘削の結果から、As-B軽石の混土層の確認できる面(As-B軽石下面)を一面として遺構の調査にあたった。

調査の方法はごく標準的な方法を用いた。表土除去は基本的に重機(バックホー等)を用いて行った。表土除去後、平面精査を行い、遺構確認を行った。確認された遺構は、埋没土層確認用ベルトを任意に設定した後、移植鋤等で掘削し、測量・写真等で記録した。個別遺構図については、平面図・断面図ともS=1:20を基本として作図した。平面図は測量会社にデジタル測量を委託し、断面図は発掘作業員によるアナログ測量を行ったものを測量会社にデジタル化を委託した。

遺構写真は、調査担当者が撮影した。iso400ブローニー版モノクロフィルムを6×7cm判サイズで撮影し、デジタルカメラでも撮影した(DVDに記録データを保存)。遺構ごとに土層断面、遺物出土状態、全景等を撮影し、さらに必要に応じて接写を行った。遺構番号は、通し番号とした。埋め戻しは基本的に重機を用いて行った。

3 整理作業の経過と方法

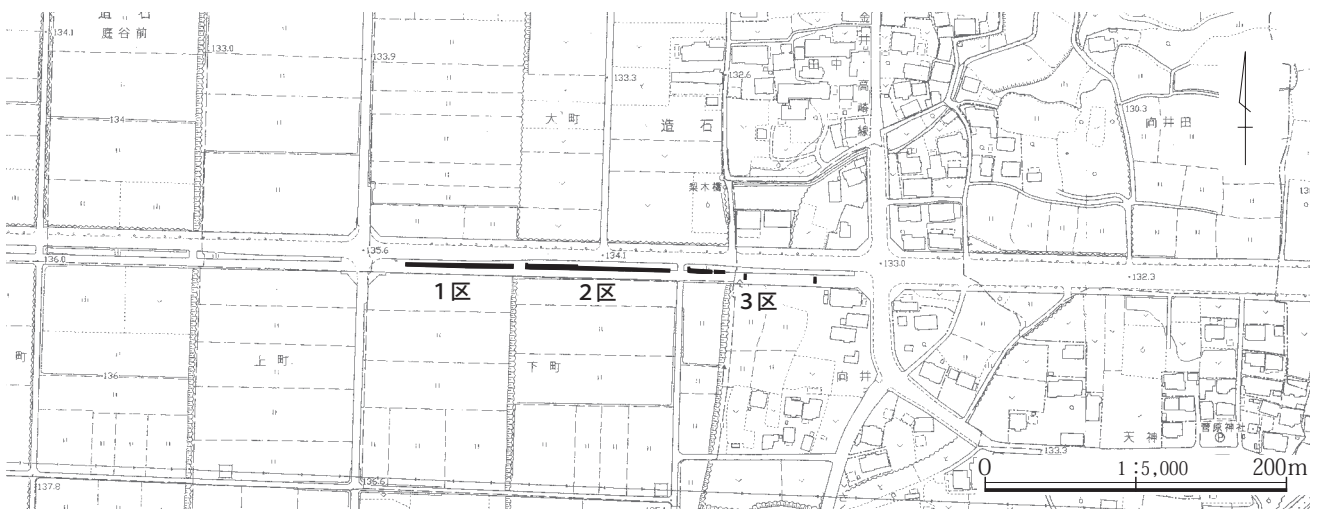
整理作業は、平成27年4月1日から5月31日まで実施し、続いて印刷を委託し、刊行に至った。

遺構図は、点検・修正・編集を行い、掲載図をデジタルデータとして作成し、版下作成を行った。

出土遺物は、写真撮影後、実測拓本等の作業を行い、トレース図を作成した。

遺構写真は、デジタル写真やブローニー版モノクロフィルム6×7cm判から編集を行った。また、これらの作業と並行して、本文原稿等を執筆した。

掲載資料は、台帳作成後収納作業を行った。



第2図 甘楽条里遺跡本調査区位置図

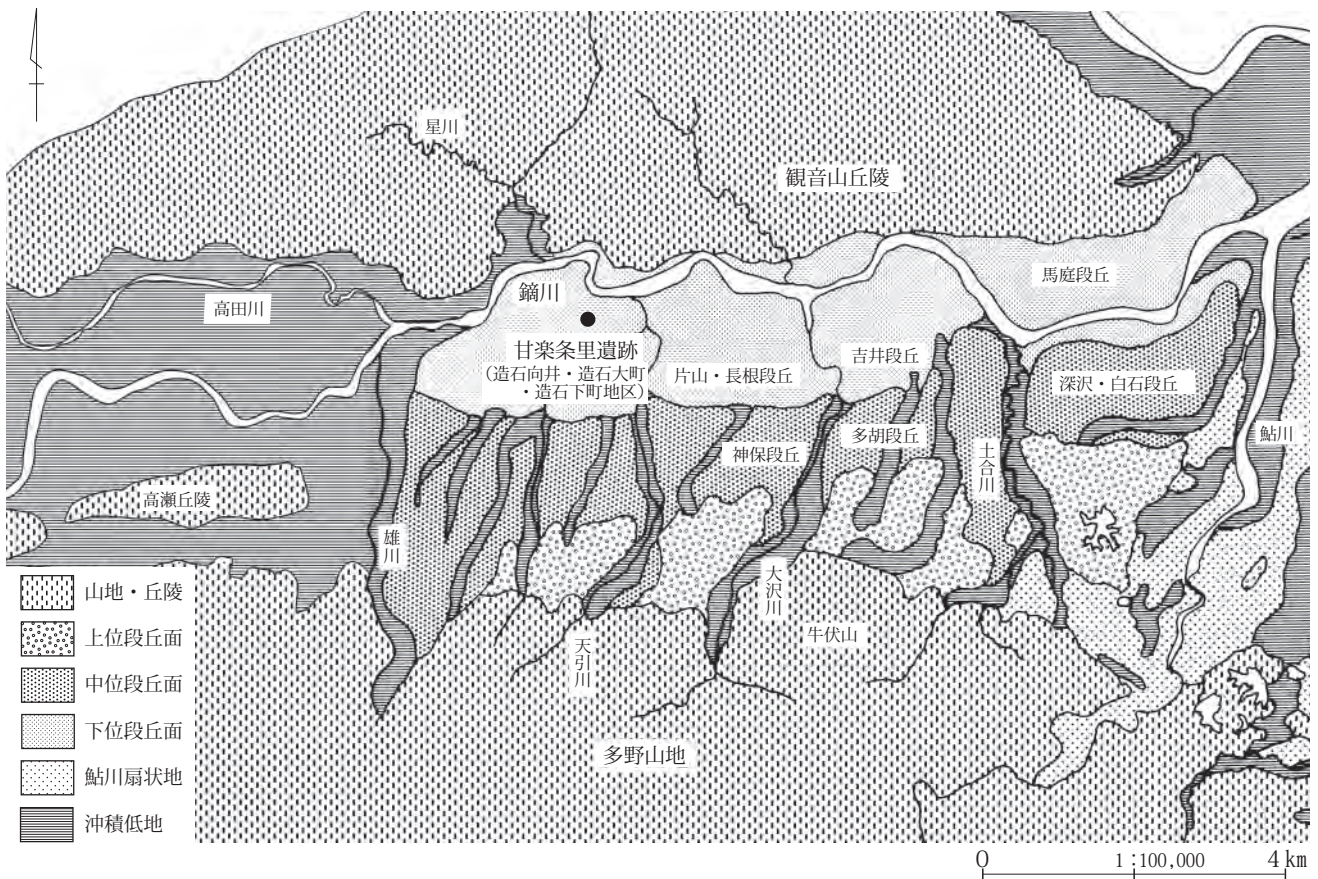
4 遺跡の位置と地形

甘楽条里遺跡のある群馬県甘楽郡甘楽町は、関東平野の北西隅、群馬県の南西部に位置している。昭和28年(1953)9月、町村合併促進法の施行に伴い、昭和30年(1955)小幡町と秋畑村が合併し、昭和34年(1959)2月に小幡町・福島町(一部富岡市に合併)・新屋村が合併し、現在の甘楽町が誕生した。甘楽町の北側は、東流する鎗川をへだてて富岡市白岩・星田地区に接し、東は高崎市(旧吉井町長根・神保地区)に、南は、御荷鉾連山を境として藤岡市日野谷に、西は稲倉山系を境として甘楽郡下仁田町に接している。町内南西部は高い山地であるのに対し、北東部は平坦な地形が多く、ここには古くから人々の生活の痕跡が残されている。

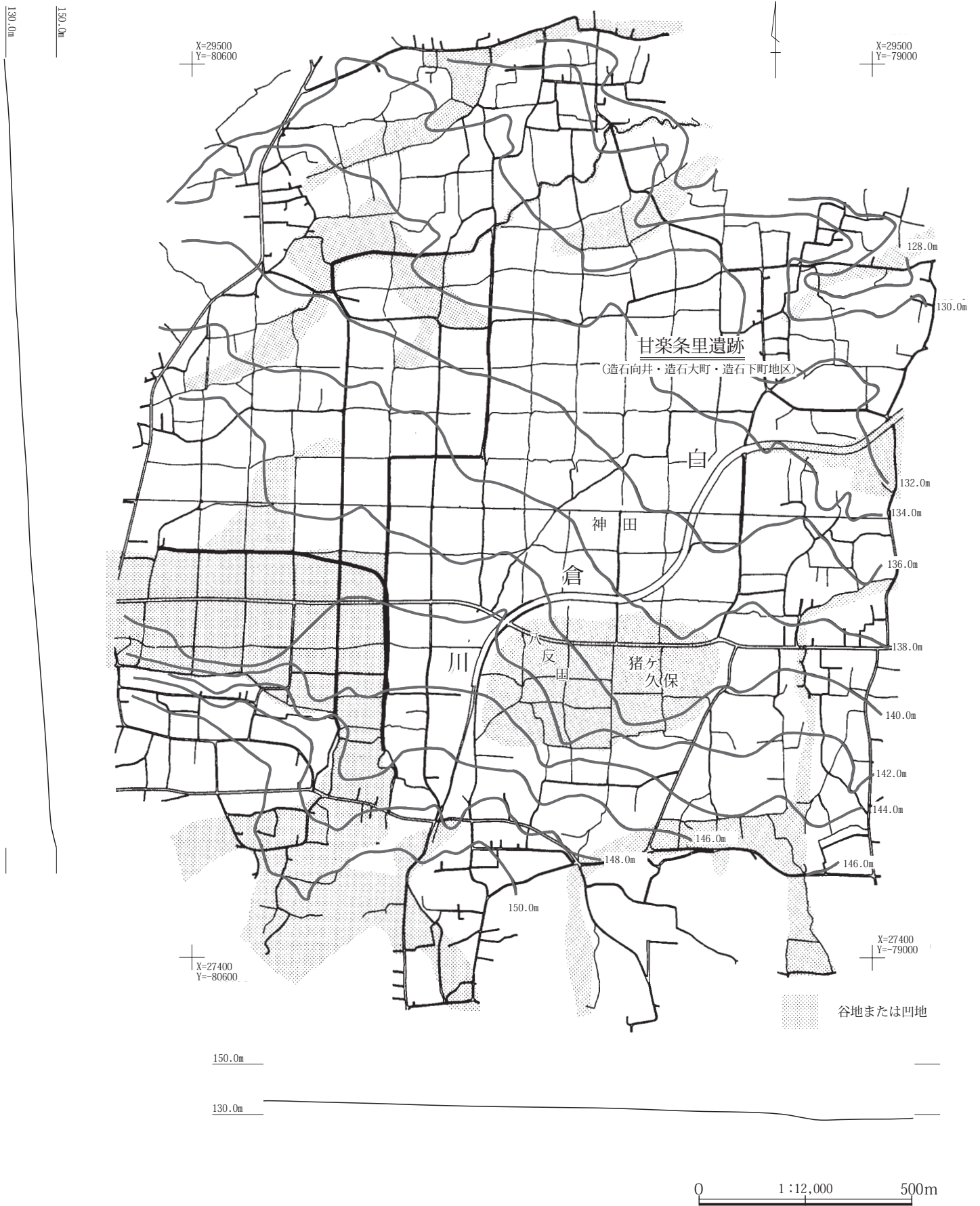
人々の生活に深く関わる鎗川は、利根川水系を構成する一級河川で、甘楽・富岡地区のほとんどを流域としている。鎗川は、下仁田町と長野県佐久市との境にある物見山に源を発し南東に流れ、下仁田市街地付近で南牧川を合わせて東へと流路を変え、高田川と合流した後、富岡盆地を経て、高崎市阿久津町付近で烏川に合流する。

流域面積は、およそ632km²、流路延長37.6kmである。下仁田町の南牧川合流地点より上流は、「西牧川」とも呼ばれている。鎗川流域に住む人々は、この流域全体を「甘楽の谷」と呼んで、慣れ親しんでいる。

鎗川は、新生代第四紀の氷河期と間氷期の繰り返しが要因と考えられる河岸段丘を形成している。急峻な流れを持つ下仁田町市街地付近までは、沖積低地の形成もほとんどなく、富岡市南蛇井町付近より沖積低地の広がりが認められ、高田川と合流する上流付近から沖積低地の大きな広がりが認められる。高田川との合流付近からは沖積低地と河岸段丘の区分は難しく、第3図ではこのあたりまでを沖積低地としておく。高田川との合流付近から形成される鎗川の河岸段丘は、右岸と左岸ではその様相が異なっている。左岸は、下位段丘面だけなのに対して、右岸では下位段丘面と上位段丘面(第3図では中位段丘面が示されているがここでは上位段丘面に含むものとする)が形成され、鎗川の河岸段丘の特色として位置づけられている。鎗川左岸に流入する星川による沖積低地が終わると、200m~500m幅の狭い段丘面を東側に形成している。高崎市馬庭付近までくると大きく南東に流



第3図 遺跡周辺の地形(「黒熊中西遺跡」1992 第3図に加筆・一部訂正)



第4図 甘楽条里の旧地形(「甘楽条里遺跡(大山前地区)」2000 第44図に加筆)

下し、比較的広範囲(南北200m～500m)に馬庭段丘を形成している。一方、右岸では高田川の合流付近より、上位・下位の二つの段丘面が形成され、左岸の馬庭段丘付近まで、南北3.5km～4kmの幅で続いている。馬庭段丘の対岸では、下位段丘は極端に幅が狭くなり、南北200m～300mを計る。東流する鑄川の河岸段丘は、鮎川の合流付近まで続くが、このあたりで鑄川をはじめとする烏川の支流が形成する沖積低地となる。

甘楽条里遺跡は、鑄川の形成した右岸の下位段丘面上にある。本遺跡全体と鑄川河床面との比高差は、10m～15mを計る。遺跡地は、鑄川が上州福島駅の北側で一旦北流したあと東流し、再び南下し、舌状に残された形を呈す台地上にある。鑄川の屈曲した流れは、対岸の星川をはじめとする鑄川への支流の浸食により形成された沖積低地に鑄川の本流が流れ込んで北上し、穴岡付近の丘陵に阻まれて再び南流したものと考えられる。その結果、広大な面積の平坦地が残され、水田耕作の適地として古くから活用されることとなった。

本調査区は、甘楽町福島から新屋にかけて広がる230haの広大な面積を有す「甘楽条里遺跡」の条里地割りの残る一角に位置し、条里地割り全体の東端部にある。甘楽町大字造石字向井・字大町・字下町に所在し、上信電鉄、上州福島駅と上州新屋駅の間地点の北400mにある。

甘楽条里遺跡の大まかな地形の様相をみてみると、条里地割りの残る遺跡地中央部は、南西から北東方向に向かって緩やかな傾斜を持つ平坦面を形成しており、現地表面の勾配は10%を計る。遺跡地南側は、上位の河岸段丘面が接し、西・北・東側は微高地が形成され、遺跡地は大きくみると盆地状の地形が形成されているといえる。第4図^(注1)のエレベーションでは、視覚的に了解できない部分もあるが、高低差を無視して、遺跡地の両端を水平にして据えると、両端がわずかに高く微高地状になっていることが理解できる。遺跡地中央部の条里地割りの残る遺跡地では、当然ではあるが、おおむね水田として活用されているのに対し、周辺の上位段丘面や微高地では、畑作や居住地として活用されていることがわかる。また、遺跡地では航空写真の立体視や等高線から、窪地や谷地形の形成を見て取ることができる。^(注2)条里地割りの開削にあたって、何らかの工法上の配慮が想定される。

5 これまでの遺跡地の調査

これまでに調査された甘楽条里遺跡(条里地割りが現存する地域内と甘楽条里遺跡に関連が予想される条里地割り縁辺部の遺跡)の調査地点(第5図・付図)と発見された遺構・遺物を概観したい。

甘楽町教育委員会・甘楽町遺跡調査会の調査

甘楽町教育委員会による発掘調査は、昭和57年度から昭和61年度にかけておこなわれた県営圃場整備事業甘楽北部地区に伴う埋蔵文化財の発掘調査であり、主にAs-A軽石下の畑、As-B軽石下の水田・溝、古墳時代の竪穴住居・溝・土坑・ピット群などがあり、甘楽条里遺跡に隣接する青木畑I・II遺跡や中椿遺跡からは、奈良～平安時代の竪穴住居などが検出されている。また、甘楽町遺跡調査会でも、As-B軽石下水田・溝・溜井などの調査がおこなわれ、報告されている。

① 昭和57年度の調査

青木畑I・II遺跡および中椿遺跡の調査は、県営圃場整備事業に伴う発掘調査であり、調査地は甘楽町大字庭谷字青木畑、大字福島字中椿である。一級河川庭谷川の付け替え工事中に竪穴住居が発見されたことにより緊急発掘調査されたものである。青木畑I・II遺跡では、16軒の竪穴住居が検出された。中椿遺跡からは、竪穴住居6軒・土坑3基が検出され、両遺跡ともに検出された遺構は出土遺物などから、いずれも奈良～平安時代のものと考えられる。これらの遺跡からは、As-B軽石下の水田関連遺構は検出されていない。

青木畑I・II遺跡は、本報告書の調査区(以降、本調査区とする)から北西に800m、中椿遺跡はほぼ真西の1250mに位置し、甘楽条里遺跡をとりまく縁辺部の微高地上に位置している。このことから、甘楽条里遺跡周辺に関連集落と位置づけることができよう。

② 昭和58年度の調査

第1調査地点～第5調査地点までが調査されている。第1・2調査地点では、表土下が白倉川の砂礫層に覆われ、遺構確認ができなかった。第3調査地点からは、As-A軽石下から、3本の畦畔に区切られたと考えられる畝状遺構を伴う畑が検出している。第4調査地点では、As-B軽石下に畦畔・水口を伴う水田が検出されている。畦畔は、合計67本認められ、このうち3本が坪

第1章 発掘調査と遺跡の概要

の条里地割りに沿ったもので、2本が南北方向、1本が東西方向の畦畔である。水田面は、36枚検出し、全面を検出した水田面の面積は、約34.7㎡～78㎡である。これらの水田面の形状は、南北方向よりも東西方向に長軸を持つ区画が多く、ほぼ並行して畦畔が作られている。

水利関連の遺構では、溝4条、水口が7カ所で確認された。水田面の標高は、概ね南西から北東方向へと低くなっており、溝・水口ともども水利条件に沿って形成されていると考えられる。また、勾配の状況は、遺跡地全体の今日の傾向と変化はない。

③ 昭和58・59年度の調査

調査は、第6調査地点～第18調査地点にわたっておこなわれた。県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査で、調査地は甘楽町大字福島地内にある。第6調査地点から第15調査地点は、本調査区の南400mにある上信電鉄が東西方向に走行する南側に沿って設定されたもので、上信電鉄の路線はほぼ条里地割りに上にある。第16調査地点は、第11調査地点の南、第17調査地点は、第8・9調査地点の南、第18調査地点は、第7調査地点のそれぞれ南側100mの位置にある。

第6調査地点では、As-B軽石下から、畦畔1本、水田面5面、畝状遺構13本、溝5条、土坑1基が検出され、溝および関連性のある位置から、木杭45本と竹筒1本が出土している。

第7～第18調査地点からは、第8調査地点を除きすべてでAs-B軽石下の水田面が確認されている。畦畔は、第7調査地点と第17調査地点で確認された。第7調査地点の畦畔は2本で、いずれも南北方向に走行しているもので、水田面は3面の確認にとどまる。検出された畦畔は、1本で、座標北に対してほぼ東西方向に走行している。検出された畦畔および溝、水田面等から、条里地割りととの関連性を深く示す根拠は見いだせていない。

④ 昭和60年度の調査

調査(第19調査地点)は、県営圃場整備に伴うもので、本調査区より南西1050m付近に位置し、甘楽町大字白倉字多井戸に所在する。条里地割りの残る甘楽条里遺跡の南西隅にあたる。検出された遺構は、As-B軽石下の水田および15条の溝である。出土遺物は少なく、遺構の性格を推し量れるものではない。検出された溝のうち、

As-B軽石下水田に関係すると考えられるものは9条で、残りの6条は比較的新しい時期のものといえる。溝6条のうち、覆土にAs-A軽石が堆積しているものが2条、As-B軽石に関連する溝と重複し、新しいと考えられるものが4条ある。第19調査地点では、水田に伴う畦畔は検出されず、条里地割りととの関係性を推し量れる遺構は確認できなかった。

⑤ 昭和61年度の調査

県営圃場整備に伴う調査で、第20調査地点～第23調査地点が調査された。本調査区より、ほぼ南1000mのところに位置し、甘楽町大字白倉字大竹、同大字金井字猪ヶ久保他に所在する。調査前の地目は、桑畑と水田であり、桑畑の層序では、ローム層が確認されている。ローム層が確認できる範囲の現地表の等高線をみると、北側に舌状に突き出た微高地を形成している。桑畑より2mほど低い現水田では、ローム層は検出されず、検出遺構の違いが認められた。第21・23調査地点は、発掘区全体の北側に位置し、発掘調査では、遺構確認面で谷地形が確認されている。

第21調査地点では、この地形変換点の等高線に沿って、山側に畦畔や溜井を伴う溝が検出されている。また、第23調査地点では、谷地を望む微高地上に竪穴住居3軒、井戸3基などが検出された。

第20・22調査地点からは、主に竪穴住居が検出されている。第20調査地点では、弥生時代から平安時代にかけての竪穴住居54軒(玉造工房住居4軒含む)、竪穴状遺構3基、土坑1基、ピット群を検出し、第22調査地点では、古墳時代竪穴住居62軒(玉造工房住居9軒含む)、集石遺構1基、ピット群が検出された。

第20～23調査地点の検出遺構は、谷地部と微高地の縁辺部で検出された畦畔や溜井を伴う溝を除くとほとんどが集落遺跡に関わる遺構であり、条里地割りととの関連が想定できる遺構は、先述した畦畔と溝を伴う溜井ということになり、調査地点がローム台地の地形であることを考え合わせると、甘楽条里遺跡の条里地割りを想定する南東端と考えることができよう。また、南側200mには鐮川の上位段丘面が迫り、調査地周辺の条里地割りも鮮明でないということからも、南東端であると追認できる。



第5図 甘菜条里遺跡の発掘調査区

0 1:10000 500m

⑥ 昭和62年度の遺構確認調査

昭和61年度の調査を受けて、昭和62年度に遺構確認調査がなされている。調査地点は、第22調査地点の西200mの地点で、甘楽町大字金井字壁谷戸に所在する。調査では、As-B軽石純層が検出され、As-B軽石下水田の可能性が指摘されている。

⑦ 平成9・10年度の調査

調査は、一般県道下高尾小幡線緊急地方道路及び地方特定道路建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査で、甘楽町遺跡調査会が実施した。調査地は、甘楽町大字福島に所在し、甘楽町大字白倉字多井戸付近の旧国道254号から南北方向に町道に沿って長さ610m、幅30m(町道部分は除く)、旧国道254号沿い東西方向に200m、幅6m(幅狭の部分も含む)にわたり調査された。本調査区のほぼ真西650mにこの調査地点の北端が位置している。

検出された遺構は、浅間A軽石処理溝(災害復旧溝)、As-B軽石下水田、溝2条、溜井9基である。出土遺物は少なく、剥片石器、弥生(樽式)土器、古墳時代から平安時代の土師器・須恵器、中世陶磁器・土器、瓦、鉄製品、古銭(渡来銭・永楽銭・寛永通宝)、木製品(椀・桶)、大量の木杭などがあげられる。

浅間A軽石処理溝(As-A軽石の災害復旧溝)は、南3区の広範囲にわたって検出されている。東西80mの範囲に、幅50cm、深さ20cmの断面逆台形の形状を持つ。各溝間は、約20cmということで、本調査区検出の復旧溝とは溝間の計測値が異なるものの、基本的な構成要素は変わらないものといえる。

As-B軽石下水田のうち、遺存状態が良好な調査地点では、30条の畦畔が検出された。東西方向に走行するものが大勢を占めるが、南北方向の畦畔が少ないのは、調査範囲に起因した結果であるが、検出された畦畔の走行状態は、ほぼ条里地割りに沿って形成されている。水田面の傾斜は、南北方向の調査範囲が狭いため限定的であるが、概ね南から北へ緩やかに低くなっているといえる。また、As-B軽石下水田に伴う溝の検出は認められないが、条里地割りに沿った近年まで使われたと考えられる1号溝の使用の上限は、開削が繰り返されたと考えれば、As-B軽石下水田の使用時にまでさかのぼれると言ってもよい。

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団の調査

⑧ 平成10年度の調査

甘楽条里遺跡(大山前地区)、福島椿森遺跡が調査されている。両遺跡の調査は、国道254号道路改築工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査である。甘楽条里遺跡(大山前地区：以降大山前地区と呼称する)と福島椿森遺跡は、甘楽町大字福島に所在し、両遺跡とも本調査区のほぼ真西にあり、大山前地区は850m、福島椿森遺跡は、1000mに位置している。また、平成8年度に調査された福島椿森遺跡は、県道下高尾・小幡線をはさんで西側に隣接している。

大山前地区の調査では、As-B軽石下の水田面とそれに伴う畦畔・溝が検出された。また、水田面の下層からは、平安時代の土師器・須恵器などを含む包含層や調査区の東半部の谷地形から溝8条、土坑1基のほか、加工木材・杭列・自然木・種実・昆虫の羽・縄文時代や弥生時代の土器や石器などが検出されている。As-B軽石下の水田では、畦畔19本、水田に伴うと考えられる溝2条が検出し、水田土壌はAs-C軽石を含む黒色または灰色粘質土であり、分析結果ではイネのプラントオパールが検出されたと報告されている。検出された畦畔は、調査地中央の1号溝を境に性格が異なっている。1号溝の東側は谷地形を形成しているが、畦畔は概ね東西・南北方向に構築されているのに対し、1号溝の西側は、傾斜する等高線に沿って構築されており、興味深い。地形的な制約または、新田開発にともなった開削である可能性もある。

福島椿森遺跡は、大山前地区とは異なり、平坦な微高地上にある。As-B軽石下の水田やそれに伴う溝・畦畔、条里地割りに関連する遺構等は検出されなかった。調査の結果、平安時代以降の土師器・須恵器の包含層、縄文時代前期から中期にかけての遺物包含層が検出されている。検出された遺構は、溝2条、土坑3基、ピット5基などが報告されている。また、平成8年度に調査され報告されている福島椿森遺跡では、溝7条、土坑62基、古銭等を伴う墓坑3基、掘立柱建物1棟、ピット列6条などである。発掘された椿森遺跡の両地点は、甘楽条里遺跡(条里地割りを持つ遺跡範囲)の北西部に位置し、甘楽条里遺跡の持つ生産域としての性格を補完する地域であることはいうまでもない。平成8年度に調査された土坑

群などの検討を通じ、集落構成として重要な墓域について、視点を持つ必要がある。

⑨ 平成18年度の調査

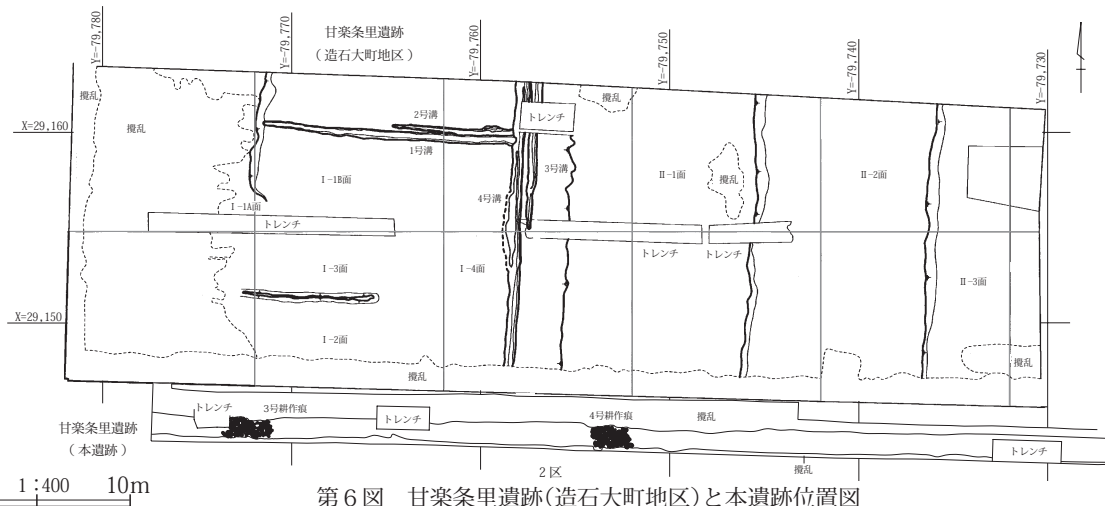
甘楽条里遺跡(庭谷深町地区：以降庭谷深町地区と呼称)、甘楽条里遺跡(造石大町地区：以降造石大町地区)、塚田遺跡、田島遺跡の調査は、国道254号(甘楽吉井バイパス)事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査である。調査区は、甘楽吉井バイパス建設に伴うため、東西方向で甘楽条里遺跡を横断するように点在する。庭谷深町地区は、本調査区の真西500m、造石大町地区は北側に隣接、東へ400mに塚田遺跡、500mに田島遺跡がそれぞれある。所在地は庭谷深町地区が甘楽町庭谷、造石大町地区が甘楽町造石、塚田遺跡及び田島遺跡は、多野郡吉井町片山(現高崎市吉井町)である。

庭谷深町地区の調査では、As-B軽石を含む黒色土の下面と水田土壌と思われる暗灰色粘質土の中位面の2面から遺構が検出されている。As-B軽石を含む黒色土の下面からは、7条の溝と耕作痕型疑似畦畔3条(水田面にある段差)が検出されている。2面の暗灰色粘質土中位面では、検出されたのは溝1条である。As-B軽石下の水田面の傾斜は、南西部から北東部に緩やかに低くなり、傾斜は約0.7‰である。検出された溝のうち、昭和49年の都市計画図(圃場整備前の地図)の地割りに沿ったものがあり、条里地割りを考える上での有効な資料といえる。耕作痕型疑似畦畔とされる水田面の段差(比高5cm)は、地形の勾配に沿った走行であり、担当者は棚田状の水田を想定している。

造石大町地区の発掘調査区は、本調査区の北に隣接するもので、本調査区との関連性は極めて高い。検出された遺構は、溝4条、水田面、畦畔1本、耕作痕型疑似畦畔3本である。溝は、南北の条里地割りに沿うもの2条、

それに直角に東西方向に走行するものが2条検出されている。畦畔・耕作痕型疑似畦畔ともにこれらの溝に平行に構築されているもので、溝及び畦畔は条里地割りと強い関係性が認められる。水田面は、溝や畦畔等の検討から、計8面の水田面を想定している(第6図)。

塚田遺跡からは、水田面・畦畔等の明瞭な水田関連遺構は検出されていない。調査遺構面は2面あり、1面からは、竪穴状遺構1基、土坑1基、溝8条が検出されている。8条の溝の走行は、いずれも昭和49年測図の甘楽町都市計画図の地割りに平行に構築され、出土遺物から中世から近世にかけて構築されたものと考えられる。各溝間の平坦面は、水田面の可能性が高いと調査者は指摘している。2面からは、建物1棟、掘立柱建物13棟、井戸1基、溝12条、ピット群(960基)が検出されている。建物・掘立柱建物は、いずれも中世のものとして推定され、溝(16号溝)を中央に東西2カ所に集中して検出されている。総柱式建物が3棟、側柱式建物が10棟、このうち下屋がつくと考えられるものが6棟ある。掘立柱建物のうち、南北方向に長軸を持つものが6棟、東西方向に長軸を持つものが4棟、総柱式で方形のものが2棟、不明1棟である。各建物の方位的なずれはあまり認められず、出土遺物などから、ある一定期間に営まれた建物群と考えられよう。いずれにせよ、これらの掘立柱建物間には重複関係があり、位置関係などを踏まえて精査して集落構成を考える必要がある。東西に掘立柱建物が集中する南に1号井戸が検出されている。建物群と同時期のものと推定されるが、今後の検討を待ちたい。12条の溝のうち、用水路と考えられるものが4条(8・12・17・18号溝)あり、いずれも中世の所産と推定されている。群集するピット群については、掘り方及び位置関係などから、掘立柱建物を追認していく余地があるが、今後の検討を待



第6図 甘楽条里遺跡(造石大町地区)と本遺跡位置図

ちたい。

田島遺跡では、As-B軽石を含む黒色土下から、水田面が検出されている。この水田面は、B軽石混土を耕作土とする耕作土下面(基底面)で、東西から南東方向へ緩やかに下っている。畦畔・水口・用水路等、関連遺構は検出されることはなく、出土遺物はまったくなかった。

⑩ 検出遺構の傾向として

これまでの甘楽条里遺跡の調査は、広大な範囲に及ぶ甘楽条里遺跡の一部分に過ぎない。検出された遺構の構成を見てみると、生産域であることを示すAs-A下の畑・水田、As-B下水田面とそれに伴う畦畔・水口・溝を検出した調査地点は、甘楽町教育委員会の第1～23調査地点の内、第20・22・23調査地点を除くすべてと、甘楽町遺跡調査会の調査地点、群馬県埋蔵文化財調査事業団による調査地点(大山前地区・造石大町地区)であった。これらの調査地点は、甘楽条里遺跡の条里地割りが鮮明に残っている中核部に位置し、北側に緩やかに傾斜する平坦な地形を有している。この調査地点からは、竪穴住居など居住域を示す遺構は検出されておらず、耕作に適した土地であるということが出来る。

それに対し、青木畑I・II遺跡、中椿遺跡、福島椿森遺跡、甘楽町教育委員会の第20・22・23調査地点からは、弥生時代から平安時代にかけて、竪穴住居などの集落関連遺構を検出している。これらの調査地は、いずれも条里地割りが鮮明に残っている甘楽条里遺跡の中核部分の縁辺部に位置し、甘楽条里遺跡をとりまくように集落が形成されている。先述の第20・22・23調査地点では、ローム層の堆積が確認されており、条里地割りの縁辺部には、ローム台地やローム質土の堆積した微高地が点在もしくは帯状に存在しているものと考えられる。甘楽条里遺跡中核部の北東部に塚田遺跡・田島遺跡があるが、集落関連遺構は確認されてはいないものの、近隣には集落遺跡の分布が想定でき、少し離れた北西部には、縄文時代から古墳時代の集落遺跡である福島駒形遺跡や福島鹿嶋下遺跡が調査されており、甘楽条里遺跡関連の集落の存在が推測できる。

福島椿森遺跡では、近世以降の墓坑または土坑が65基検出されている。近世以降の甘楽条里の地で生活してきた人々の生活の所産であることはいうまでもない。墓域を含めた甘楽条里遺跡の構造的な理解のために、調査や研

究の進展が望まれるところである。

6 周辺の遺跡

人々の生活にとって、河川の果たす役割は大きいことはいうまでもない。甘楽条里遺跡のある「甘楽の谷」には、鑄川の悠久の流れとともに人々の生活が展開され、たくさんの痕跡が残されている。そうした鑄川流域の歴史をここでは時代を追って垣間見ていきたい。

旧石器時代

昭和61年より始まった関越自動車道(上越線)建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査では、これまで旧石器時代遺跡の空白地域であった鑄川流域で、初めてその存在が認められ、旧石器研究が始まることとなった。その後の旧石器遺跡の調査例は吉井町に1ヵ所があるのみであるが、中位段丘には崖線に沿うように旧石器遺跡が分布しており、今後、段丘面を刻む河川流域の旧石器調査が進めば、より旧石器人の生活や行動を知る資料となるだろう。

甘楽町白倉下原・天引向原遺跡(41)では、いずれも始良Tn火山灰(AT)下層から、台形様石器、局部磨製石斧、石刃、石核、剥片、敲石が出土し、6ヵ所で環状ブロック群を検出している。また、同天引狐崎遺跡(42)でも、始良Tn火山灰(AT)の下層から、ナイフ形石器、台形様石器、スクレイパー、楔形石器、礫が出土し、7ヵ所で環状ブロック群が検出された。同様に鑄川右岸の河岸段丘上位面で調査された遺跡には、下仁田町下鎌田遺跡(8)(石器ブロック1・黒曜石製ナイフ形石器など)、富岡市野上塩之入遺跡(12)、同下高瀬寺山遺跡(19)、吉井町(現高崎市)長根安坪遺跡(44)、同神保富士塚遺跡(47)、同多胡蛇黒遺跡(53)、同矢田遺跡(55)、同多比良追部野遺跡(56)、同黒熊八幡遺跡(68)など多くの遺跡が調査されている。これらの遺跡で認められる文化層は、そのほとんどが、始良Tn火山灰(AT)の下層からの検出であった。始良Tn火山灰(AT)堆積後においては、旧石器時代の文化層の検出は少ないという傾向が認められる。このことは、鑄川流域、とりわけ右岸の特色として捉えることができよう。

縄文時代

縄文時代の遺構・遺物は、鑄川上・中位段丘面や丘陵

を中心にその分布が認められる。時期によってその濃淡があり、草創期・早期・晩期は遺構数・出土遺物は少ない傾向にあり、中期後半の時期が遺構・遺物ともにその数量が最も多い傾向にある。

縄文時代草創期は、旧石器時代終末の傾向と同様に、検出された遺物は少なく、遺構は確認されていない。遺物としては、下高瀬寺山遺跡で出土した柳葉形尖頭器、矢田遺跡で尖頭器、藤岡市の竹沼遺跡(72)の有舌尖頭器などがあげられる。また、下鎌田遺跡では、当該期とされる局部磨製石斧の出土が報告されている。

縄文時代早期でも遺構の検出例は少ない。下鎌田遺跡では、不整形の竪穴住居から、早期撚糸文式土器および押型文式土器が検出されたほか、下高瀬寺山遺跡では陥し穴状土坑が検出されているのみである。遺物のみ出土した遺跡としては、多比良追部野遺跡で撚糸文式土器、富岡市上丹生字和田地区、同内匠日向周地遺跡(22)、吉井町入野遺跡(58)で押型文式土器が採集または出土している。

また、吉井町西場脇遺跡(45)で、沈線文式土器、同神保植松遺跡(48)では早期後半の条痕文式土器がそれぞれ出土している。

縄文時代前期になると、昭和61年から始まった関越自動車道(上越線)地域の埋蔵文化財の発掘調査によって、これまで以上にその様相が明らかになってきた。前期関山式期では、下鎌田遺跡で当該期の竪穴住居19軒が検出されたほか、野上塩之入遺跡、富岡市本宿・郷土遺跡(10)においても竪穴住居が検出されている。同南蛇井増光寺遺跡(5)、下鎌田遺跡は、互いの立地が鑄川の対岸にある遺跡で、前者は鑄川左岸の下位段丘面、後者は右岸の下位段丘面より上位の通称「鎌田の台地」の先端部の舌状台地に位置している。両遺跡からは、黒浜式期の集落が調査され、両者の関連性については興味深いものがある。諸磯式期の竪穴住居の調査では、下高瀬寺山遺跡で9軒、富岡市中高瀬観音山遺跡(18)で6軒調査され、甘楽町小幡佐久間遺跡(46)でも当該期の竪穴住居5軒が調査されている。また、富岡市内匠諏訪前遺跡(24)では、十三菩提式期と考えられる竪穴住居が検出され、南蛇井増光寺遺跡では当該期の土坑が数基検出されている。

縄文時代中期になると遺跡の分布域が鑄川下位段丘面にも広がりを見せ、遺構数も大幅に増加する傾向になる。黒熊八幡遺跡、富岡市小塚遺跡(13)では、五領ヶ台式土

器を伴う竪穴住居や埋設土器が検出し、南蛇井増光寺遺跡では、500基ほどの土坑が検出されている。阿玉台・勝坂式期の遺構としては、南蛇井増光寺遺跡、下鎌田遺跡、富岡市内匠上之宿遺跡(25)、長根安坪遺跡などがあげられるが、下鎌田遺跡からの検出遺構が最も多く、南蛇井増光寺遺跡とともに信州系土器群を伴って竪穴住居20軒以上が検出されている。加曾利E式・曾利式期の検出遺構は爆発的に増えてくる。下鎌田遺跡竪穴住居147軒(敷石住居2軒含む)、南蛇井増光寺遺跡竪穴住居18軒(敷石住居3軒含む)、富岡市田篠中原遺跡(27)竪穴住居13軒(敷石住居11軒・竪穴住居2軒)・環状列石1基・配石遺構36基・埋設土器12基など、大規模集落や短期で終わる拠点集落が確認されている。矢田遺跡、吉井町黒熊遺跡群(61)、同東吹上遺跡(40)、また、本宿・郷土遺跡などでも敷石住居を含む当該期の遺構が調査されている。

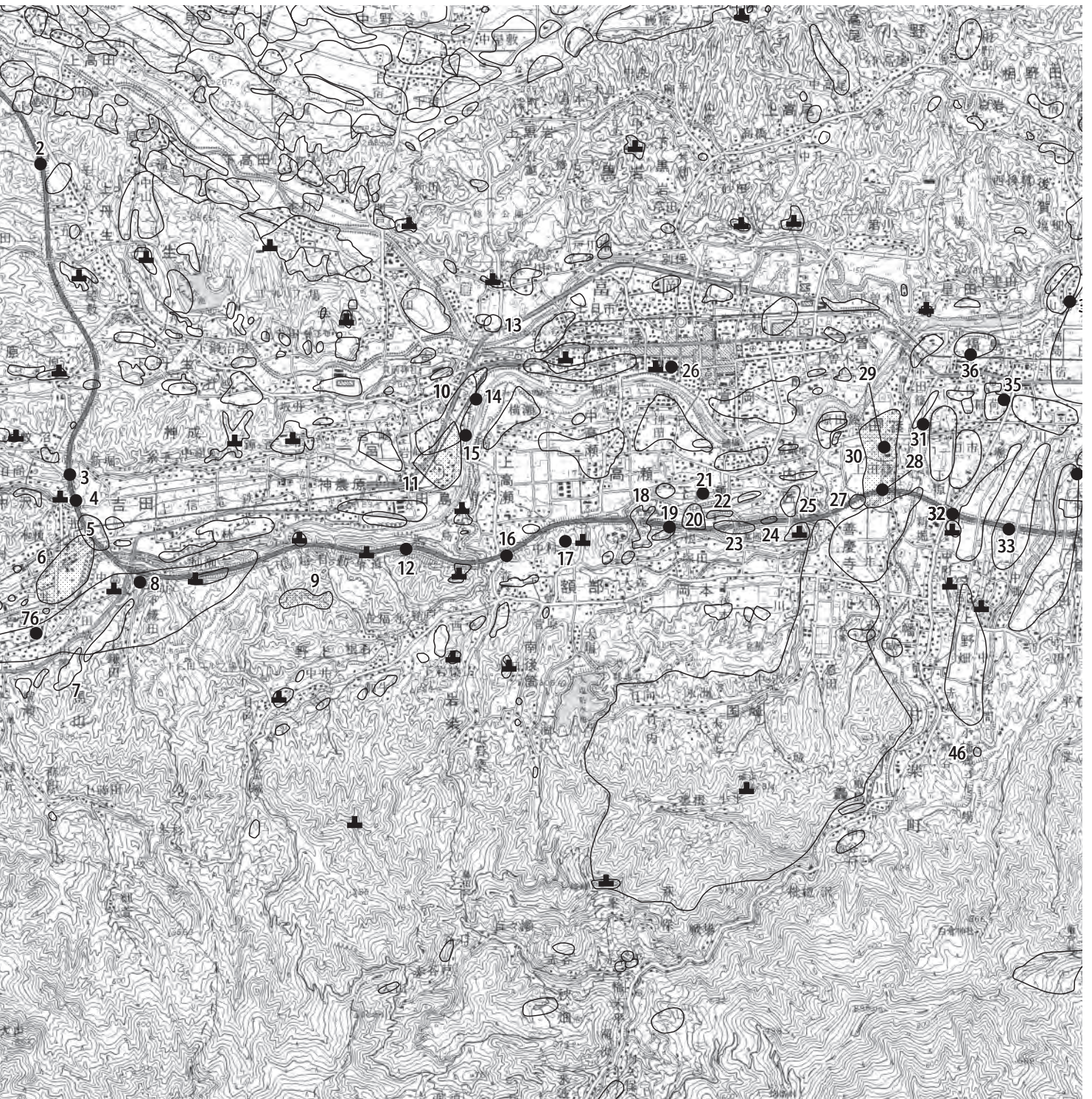
縄文時代後期の遺跡は、中期後半の拡大傾向に対し、一転縮小傾向に転じるといってよい。検出された遺構・遺物は少なく、遺跡は南蛇井増光寺遺跡、下鎌田遺跡、内匠上之宿遺跡、白倉下原遺跡などである。これらの遺跡からは、敷石住居・竪穴住居・土坑・屋外埋設土器等が称名寺式期～加曾利B式期までの土器を伴って検出され、富岡市坂詰遺跡(31)では、当該期の土坑が調査されている。

縄文時代晩期の遺構・遺物は、鑄川流域から検出例が少なくなり、極端に減少する。富岡市生田遺跡(15)、藤岡市温井遺跡^{*}で少量の土器が確認されているに過ぎず、南蛇井増光寺遺跡では、晩期末から弥生時代中期の土坑を検出しているという報告があるのみである。

鑄川中流域の縄文時代の遺跡分布の様相は、草創期・早期は、活発な動きは認められず、縄文時代前期関山式期に最初の画期が認められることになる。その後、中期前半では減少しながらも存続し、加曾利EⅢ式期になると遺跡数・遺構数ともに最大の画期を迎えている。その後の後期・晩期は急速に停滞し、弥生時代を迎えることになる。

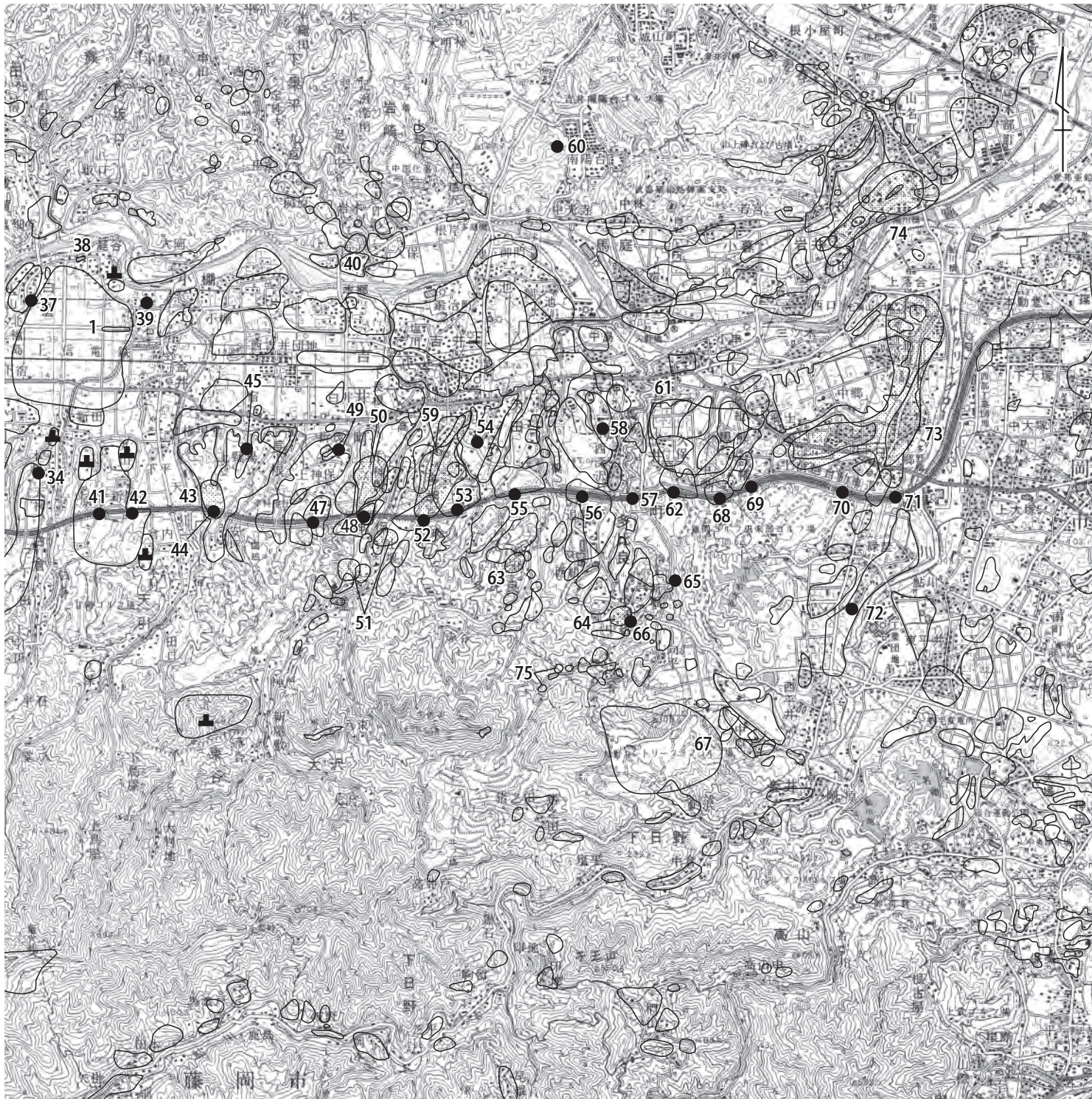
弥生時代

縄文時代晩期または弥生時代前期とされる遺構・遺物は、縄文時代の項でも述べたとおり、その痕跡は希薄である。群馬県内の山間地域では、当該期の墓制(再葬墓等)に関わる遺跡が散見されるが、鑄川流域のみならず、群



■ 城館跡等 ■ 古墳群

第7図 周辺の遺跡(国土地理院地形図「富岡」平成7年4月18日発行5万分の1「高崎」平成10年12月1日発行5万分の1と群馬県教育委員会事務局文化財保護課のマッピングぐんまを使用)



0 1:60,000 2km

馬県下全体の集落遺跡の傾向を把握していくことが求められている。

弥生時代中期になると、鎭川下位段丘面、その支流の自然堤防上や扇状地上にも遺跡の分布が認められるようになるが、鎭川流域全体を見ても遺構数からすると決して多いとは言えない。神保植松遺跡(竪穴住居3軒)、小塚遺跡(竪穴住居7軒)、富岡市内匠日影周地遺跡(23)(竪穴住居1軒)、中高瀬観音山遺跡(竪穴住居1軒)、南蛇井増光寺遺跡(竪穴住居4軒)、下鎌田遺跡(竪穴住居3軒)では、小規模な集落が調査されているほか、神保富士塚遺跡で土坑群、前述の小塚遺跡で環濠など当該期の遺構が検出している。

弥生時代後期になると、上位段丘面(丘陵地)や下位段丘面いずれにおいても、大規模集落が出現するようになる。中沢川の形成した扇状地にある南蛇井増光寺遺跡では、154軒もの竪穴住居が検出され、その大規模さには驚きを隠せない。一方、鎭川右岸の独立丘陵、高瀬丘陵(別称北山・離れ山)にある中高瀬観音山遺跡でも103軒の当該期の竪穴住居が検出されている。高瀬丘陵は、鎭川右岸の下位段丘面との比高差60m、南側(額部・岡本地区)との比高差は40mを計る。遺跡地は、下位段丘面に突出した舌状台地の付け根の部分の平坦面にあり、103軒もの竪穴住居が比較的短期間のうちに密集して構築されている。中高瀬観音山遺跡は、立地やその他の検出遺構から、きわめて特殊な性格を想定する研究者もいるが、その評価については生産域や生産手段との関連を考えた上での評価を待ちたい。南蛇井増光寺遺跡、中高瀬観音山遺跡ともに、大規模な集落遺跡であることに間違いはないが、二つの集落に伴う生産域・生産手段(稲作に限定するものではない)や墓域といった集落を構成する要素が不明であるため、それらの実像を明らかにしていくことが急務と言える。一方、内匠日影周地遺跡(竪穴住居13軒)や天引狐崎遺跡(竪穴住居40軒)も集落遺跡と言えるが、内匠日影周地遺跡は中高瀬観音山遺跡と同じ高瀬丘陵に立地する集落遺跡であり、関連性を検討する必要がある。また、甘楽町白倉上野遺跡(34)では、総数350軒以上の後期の竪穴住居が検出されているが、遺跡地は白倉川と庭谷川にはさまれた上位段丘上の舌状台地に位置し、中高瀬観音山遺跡と立地等の条件は似ている。詳細な報告を待ちたい。方形周溝墓状の遺構が検出され

た遺跡は、黒熊遺跡群、吉井町川内遺跡(54)などがあげられるが、土坑墓等を含め、当該期の墓制の解明も多くの課題がある。

古墳時代

『上毛古墳総覧』によると、鎭川流域を中心とする旧北甘楽郡では総数357基(妙義町15基を含む)、多野郡吉井町(現高崎市)等で303基の古墳が掲げられている。昭和初期の調査の精度としては、一定の評価と価値が与えられるが、『富岡市史』によれば、現在400基を超える古墳の存在が確認されている(『上毛古墳総覧』では富岡町97基、黒岩・一宮等34基と表記されている)。それだけとってみても、古墳の数量は、『総覧』をはるかに超えるものといってよい。また、墳丘に明瞭な盛り土を持たない方形周溝墓状の低墳丘墓の存在も考え合わせると、これに見合った集落遺跡、生産域といったものが想定できるので、古墳時代の鎭川流域の遺跡地は、広範囲に及ぶものと考えられる。ここでは、集落遺跡と古墳についてそれぞれ項立てて記載したい。

① 集落遺跡

古墳時代前期の集落遺跡は、弥生時代後期の大規模集落が形成されるのとは対照的に、小規模な集落遺跡が鎭川流域に散在している。鎭川上位段丘面や丘陵地に集落が展開されるだけでなく、下位段丘面にも弥生時代後期に引き続いて形成されている。弥生時代後期の大規模集落では、古墳時代前期になると、集落の形成が途絶えたり、大幅に規模を縮小したりする傾向が強い。弥生時代後期から古墳時代前期の同遺跡における竪穴住居の数量の変化を見ると、中高瀬観音山遺跡は103軒から3軒、南蛇井増光寺遺跡は181軒から2軒(弥生時代終末期とされるもの1軒含む)、先述の白倉上野遺跡(下小塚V遺跡2014報告分)は143軒から6軒というように、極端な減少が認められる。中高瀬観音山遺跡や白倉上野遺跡は、丘陵上に立地しているが、南蛇井増光寺遺跡は段丘崖に近い平坦地に築かれていることから、単なる立地条件に既定された結果ではなく、経済的な理由に要因を求めると必要がある。これまでに確認された古墳時代前期の主な集落は、前述の通りいずれも中・小規模と考えられるもので、矢田遺跡、吉井町折茂東遺跡(49)、長根安坪遺跡、甘楽町松葉慈学寺遺跡(33)、同西原遺跡(32)、同福島駒

形遺跡(36)、富岡市千足遺跡(2)、内匠上之宿遺跡、内匠日影周地遺跡、富岡市下高瀬上之原遺跡(20)、下仁田町観音寺原遺跡(7)などがあげられる。

古墳時代中期においては、調査された遺跡は少ないが、前期同様の小規模な集落が検出されている。中高瀬観音山遺跡では、前期に続いて中期でも集落が営まれるが、その規模はさほど大きくなく、9軒の竪穴住居が検出されている。矢田遺跡、多比良追部野遺跡、折茂東遺跡など、いずれも数軒の竪穴住居が検出しているに過ぎない。

古墳時代後期になると、これまでの集落形成のあり方が一変する。前・中期の集落が河岸段丘上位面や丘陵上の台地に形成されるものが多かったのに対し、下位段丘面の平坦地にも規模の大きな集落が営まれるのと同時に、遺跡毎の集落規模そのものが飛躍的に拡大するようになる。本宿・郷土遺跡では、113軒の竪穴住居とともに居館を想定できる溝が検出され、南蛇井増光寺遺跡、富岡市中沢平賀界戸遺跡(4)、同前畑遺跡(3)、松葉慈学寺遺跡、甘楽町甘楽条里遺跡(1)、白倉上野遺跡、矢田遺跡など、古墳時代後期の大規模集落が鎚川流域全体に展開されるようになる。むろん、大規模集落だけということではなく、鎚川の上位段丘や丘陵地、下位段丘の平坦面で中小規模の集落も形成されている。こうした集落の大規模化や集落数の増化は、とりまおさず古墳の増加・群集墳の形成へと連動し、それぞれの集落が近隣の群集墳の成立に深く関わっているものと考えられる。また、集落規模の増大や群集墳の成立には、それを支える経済的基盤(生産域・生産手段)があり、そのことを視野に入れて考えていく必要がある。

② 古墳

鎚川流域全体の古墳の数量は相当数にのぼることはない。鎚川の下位段丘の平坦面に構築された群集墳などは、低墳丘のものが多く、近世以降の開墾によって確認できないものも多く、量的な把握を正確にすることは難しい。ここでは、各期の様相について集落遺跡との関連等を視野に入れて概観したい。

弥生時代より検出している方形周溝墓または方形周溝状遺構も当該期に比定されるものもあるが、検出例は多くない。富岡市稲荷森遺跡(14)、下鎌田遺跡、白倉下原・天引向原遺跡、神保植松遺跡、長根安坪遺跡、天引狐崎遺跡などで調査されている。

鎚川流域での古墳時代前期から中期の築造とされる古墳は少ない。そのうち、最も古式の初期古墳とされているものは、富岡市北山茶白山西古墳(16)及び同北山茶白山古墳(17)である。両古墳は、単独丘陵上の頂上部にあり、丘陵を削りだして墳丘を造成したもので、鎚川流域の最古級の首長墓に推定されている。また、甘楽町にある天王塚古墳(35)は、全長76mの前方後円墳で、竪穴系の主体部を持つと想定されている首長墓クラスの墳丘を持ち、鎚川の下位段丘面に立地している。天王塚古墳は鎚川流域で最も古い前方後円墳とされ、5世紀の初頭に比定されている。これらの古墳の立地条件は、4世紀後半の所産とされる最古級の北山茶白山西・北山茶白山両古墳は丘陵の頂上部、5世紀初頭の所産とされる天王塚古墳は下位段丘の平坦面という対比になり、時間的な変遷としては、丘陵地から平坦地へということを経験している。北山茶白山西・北山茶白山両古墳周辺の古墳時代前期集落遺跡は、弥生時代後期から一変して減少する傾向にあることは先にも述べたが、この現象を居住域の選定にあたっての変化と捉えたと、丘陵上の集落構成から経済的理由による平坦地への移行と考えることができよう。丘陵にそびえ立つ北山茶白山西・北山茶白山両古墳から北側に望める平坦地に、中小規模の集落の多くが形成されたものと思われ、中期以降の集落も前期と同様の傾向が続くものと考えられる。その後の天王塚古墳の平坦地での築造や古墳時代後期集落、群集墳の形成等考え合わせると、このような集落構成の変化について、説明できるのではないだろうか。

その他、中期古墳に確実に比定される古墳は少ない。関越自動車道(上越線)の発掘調査では、内匠日影周地遺跡で1基、下高瀬上之原遺跡で2基の5世紀後半以降に比定されるものが調査されている。これらの古墳は、いずれも丘陵の頂上部に構築された群集墳の一つであるが、首長墓以外の墳墓の造営は丘陵部では継続されていたことを示している。下位段丘面で5世紀代に比定される古墳としては、舟形石棺を伴う大山鬼塚(福島町6号)古墳(37)(甘楽町小川)があるが、未調査の群集墳の中には5世紀代の古墳が多くはないにせよ確実に存在すると言える。

古墳時代後期の6世紀代になると、鎚川流域全体の段丘面・丘陵地で古墳の築造が活発化し、集落近郊に古墳

群が形成されるようになる。鎭川上流域の下仁田町の馬山古墳群(76)から藤岡市白石古墳群(73)、高崎市山名古墳群(74)までの鎭川沿いには、およそ33群の古墳群が知られている。おそらく、下高瀬上之原遺跡のような丘陵上や下位段丘にある未だ知られていない古墳群の存在も想定すると、その数量は増える可能性が高い。鎭川流域の古墳群の内、上位段丘面や丘陵地に形成されている古墳群は、上流から富岡市中山古墳群(9)、吉井町安坪古墳群(43)、同神保古墳群(50)、同多胡古墳群(59)、同塩Ⅰ・Ⅱ古墳群(51)、同山の神古墳群(63)、同中ノ原古墳群(64)など8群が知られ、その他は下位段丘面に形成されており、圧倒的に下位段丘面の平坦地に築かれているものが多い。下位段丘面に多い現象は、前期・中期古墳のところでも触れたように、居住域の変遷といったことが考えられる他、葬送儀礼の変遷としても捉えられる。また、群集墳の近隣には、それを支える集落遺跡があることが多い。例えば、本宿・郷土遺跡と富岡市一ノ宮古墳群(11)、富岡市原田篠遺跡(29)と同上田篠古墳群(30)、南蛇井増光寺遺跡と富岡市南蛇井古墳群(6)などであるが、このことは、当該期の集落と墓域の基本形と言わなければならず、それぞれ検証していく必要がある。

古墳群の様相を見ていくと、6世紀初頭から始まる古墳の造営は、後期の後半になると一層の拍車がかかり、群集墳の形成という結果を生むことになる。古墳時代前期から中期までは一定程度の首長クラスが対象となっていた古墳造営が、その対象の広がりとともに増加したということでもある。こうしたことは、農業生産力の増大や葬送儀礼の変遷として捉えることができ、終末期においてもこうした変遷を受けて、新たな展開がなされるものと思われる。

鎭川流域において、初めて埴輪窯跡が内匠上之宿遺跡で調査された。谷頭のある傾斜面に2基作られており、埴輪供給のあり方を知る大きな手がかりとなるもので、藤岡市本郷埴輪窯跡群^{*}の検討と合わせて検証していく必要があろう。

奈良・平安時代

奈良・平安時代の遺跡は、鎭川流域全体の至る所で確認されている。下位段丘面、上位段丘面、丘陵地のいずれからも多種多様な遺構・遺物が検出されている。ここ

では、検出された遺構の性格に合わせて項立てていくものとする。

① 集落遺跡

当該期の集落遺跡は、基本的には古墳時代後期の集落がそのまま継承されることが一般的な傾向である。それ以外にも、地形的に居住に支障が少ない土地では、その濃淡はともかくとして、積極的に居住地として開発されていると言ってよい。集落遺跡では、竪穴住居・掘立柱建物・溝・土坑(土坑墓)・井戸など、多彩な遺構が検出されている。

南蛇井増光寺遺跡、中沢平賀界戸遺跡、松葉慈学寺遺跡、甘楽条里遺跡、白倉上野遺跡、白倉下原・天引向原遺跡、矢田遺跡、神保富士塚遺跡等は、古墳時代後期からの継続集落で比較的に規模が大きく、安定した集落構成が継続している。当該期に集落規模が縮小傾向にある遺跡は、原田篠遺跡、内匠日向周地遺跡、下高瀬上之原遺跡、下高瀬寺山遺跡、中高瀬観音山遺跡などで、丘陵地形に立地する遺跡に多いが、同様の立地条件の下でも、古墳時代からの継続集落でない吉井町多比良平野遺跡(57)や藤岡市白石根岸遺跡(70)などもある。集落立地の変遷ということでは丘陵地から平坦地への移行といえるが、丘陵地での集落形成は途絶えることなく継続しており、その様相は一様でない。経済的な基盤である農業生産等の吟味の中で検証していく必要がある。

② 水田・畠

甘楽条里遺跡に認められるような地割りは、通称「高瀬田圃」に代表されるが、ここでは、As-B軽石が堆積する溝が検出され、条里水田の存在が期待されている。甘楽条里遺跡と同様に発掘調査で明らかになったAs-B下水田は、内匠日向周地遺跡、富岡市田篠上平遺跡(28)、中沢平賀界戸遺跡、多比良追部野遺跡、白石根岸遺跡、黒熊八幡遺跡などがある。いずれも小規模なもので、谷地形を利用したものと考えられている。また、白倉下原・天引向原遺跡では、As-B軽石下の畠が検出されている。

③ 窯跡・鍛冶製鉄遺構

発掘調査されたり、確認されたりしている窯跡は多くはない。吉井町末沢Ⅰ・Ⅱ窯跡(75)では、8世紀前半代の蓋・杯・瓦・甕等の須恵器が検出され、同下五反田窯跡(65)では9世紀～10世紀に比定される窯跡が3基、藤

岡市下日野金井窯跡(67)では10基程度(8世紀~10世紀)が確認されているほか、上野国分寺に瓦を供給したと考えられている吉井町滝ノ前窯跡(66)などが知られている。また、当事業団職員によって確認された、同南陽台窯跡群(60)がある。

製鉄関連遺構としては、吉井町黒熊栗崎遺跡(69)で、小鍛冶遺構を伴う竪穴住居(9世紀代)が2軒検出されているほか、下日野金井窯跡で窯跡とともに製鉄遺構3基が確認されている。また、古代寺院跡が確認されている吉井町黒熊中西遺跡(62)では10基もの鍛冶遺構が検出され、寺院跡との関連性が注目されている。

④ 寺院跡・墓制

関越自動車道(上越線)の埋蔵文化財発掘調査では、いずれも丘陵地に造営された寺院跡が調査されている。白倉下原・天引向原遺跡、黒熊中西遺跡、黒熊八幡遺跡がある。白倉下原・天引向原遺跡では、寺院跡や周辺の竪穴住居等から布目瓦のほか、「福天寺」と書かれた墨書土器が出土し、寺院の名称と推定され注目されている。黒熊中西遺跡でも、瓦葺き2棟を含む8棟もの礎石建物の他、テラス・道路遺構とともに寺院跡との関連が考えられる竪穴住居群が検出されている。両遺跡からは、いずれも鍛冶遺構が検出され、竪穴住居の検出とともに寺院の構成や性格を検証するための貴重な成果が上げられている。また、黒熊八幡遺跡では、礎石建物、掘立柱建物、配石遺構など寺院跡関連施設と考えられる遺構が検出された。また、黒熊栗崎遺跡は、検出竪穴住居群に南接して、「塔之峰廃寺」の存在が知られ、白倉下原・天引向原遺跡と同様の傾向が想定できる。これらの寺院跡は、その立地条件や関連集落の存在、寺院建立とその存続のための様々な問題・課題を提起しており、その解明が望まれている。当該期の遺跡からは、土坑が検出されることが多いが、土坑の性格を限定できるものは少ない。黒熊八幡遺跡では、完形の杯・椀を伴うことから出土遺物を副葬品と捉えて土坑墓と位置づけている。

中世

中世以降の遺跡として、最も多く記録化されたり現地調査されたりしているのは城館跡であり、発掘調査された遺跡は多くはない。11世紀以降、それまで集落遺跡で検出された竪穴住居も建屋構造の変化によって激減し、

掘立柱建物や一部竪穴状遺構などに取って代わり、遺構・遺物からの吟味に制約されることも多い。こうした中で調査された集落遺跡は、内匠上之宿遺跡、神保植松遺跡、千足遺跡、中沢平賀界戸遺跡で掘立柱建物・竪穴状遺構・井戸等が検出され、神保植松遺跡で掘立柱建物32棟、竪穴状遺構5基が調査され、比較的規模の大きい集落遺跡と言える。他の遺跡は規模も小さく、限定的であった。白倉下原・天引向原遺跡や南蛇井増光寺遺跡では、道状遺構が調査され、これまでにない検出遺構の多様化が認められた。比較的規模の大きな溝が検出された遺跡として、神保植松遺跡(城跡)、吉井町神保下條遺跡(52)、神保富士塚遺跡、南蛇井増光寺遺跡があるが、神保富士塚遺跡と南蛇井増光寺遺跡の検出溝は箱葉研状の掘り方を持ち、館跡もしくはそれに相当する遺構の可能性がある。

多比良追部野遺跡と内匠日影周地・日向周地遺跡からは、この時期としては発見例の少ない水田が調査され、当該期の水田の様相を垣間見ることができる。

中世墳墓・土坑墓の検出例も少ない。入野遺跡、西原遺跡、南蛇井増光寺遺跡でそれぞれ、土坑墓や墳墓が調査され、藤岡市白石大御堂遺跡(71)では、中世寺院とともに埋葬、茶毘遺構群を検出している。

鎚川流域には、およそ200カ所の城館跡が点在している(群馬県の中世城館跡1988)とある。中世~近世にかけて築造されたものである。むろん、時代的な編成過程は個々においてさまざまであるが、鎚川流域が、信州或いは秩父との重要な交通の要衝の地であることを物語っているのみならず、この地域の経済的基盤に基づいて、豪族ないし武士団の活発な動き(政治的・軍事的動勢)として捉えることができよう。

近世

近世以降の城館跡と周知の遺跡(甘楽町庭谷代官所跡(38)、同法華経供養遺跡(39)、富岡市富岡陣屋跡(26)など)以外で検出した遺構は、中世の遺構とともに検出されることが多い。内匠日向周地遺跡、白倉下原・天引向原遺跡、富岡市下高瀬前田遺跡(21)では、As-A軽石下から水田や畑が検出されている。

甘楽条里遺跡で確認されているAs-A軽石降下後の災害復旧溝なども平坦地では相当数になると思われるが、報告がなされない場合もあり、明らかになっていな

第1章 発掘調査と遺跡の概要

第1表 周辺遺跡一覧表

遺跡	旧石	縄文	弥生	古墳	奈良	中世	近世	遺跡の概要	文献
1 甘楽条里遺跡				○	○	○	○	本遺跡。	4.5.6.7.8.12.13
2 千足遺跡				○	○	○		中世の溝(覆土中にAs-B軽石を含む)検出。縄文・弥生土器片出土。	43
3 前畑遺跡		○	○	○	○			縄文中期の住居跡26軒、掘立柱建物跡(古墳)、奈良・平安時代の集石・井戸・溝等。	44
4 中沢平賀界戸遺跡		○	○	○	○	○		縄文～中世にかけての複合集落遺跡。掘立柱・礎石建物・中・近世の塚・墓坑など。	37
5 南蛇井増光寺遺跡		○	○	○	○	○		縄文～奈良・平安時代の複合集落遺跡。縄文中期信州系土器検出。中・近世の遺構も多岐にわたって検出している。	25
6 南蛇井古墳群				○	○			52基の古墳が確認されている。埴輪を伴うものが9基あり、横穴式石室も確認されている。	上毛古墳総覧.62
7 観音寺原遺跡				○	○			縄文時代の耳飾り、古墳時代～奈良・平安時代の住居跡等。	67
8 下鎌田遺跡	○	○	○	○				A T下層よりナイフ形石器などの石器群のブロックが検出。縄文草創期石器、早期住居跡検出。縄文前期黒浜式期から中期にかけての大集落。信州系土器群共伴。	60
9 中山古墳群				○				富岡市野上の丘陵地に数基認められる。後期の古墳群か。	上毛古墳総覧.62
10 本宿・郷土遺跡		○	○	○		○		古墳時代の豪族居館址。縄文～弥生時代の住居跡、中世建物群など調査。	46
11 一ノ宮古墳群				○				2基の前方後円墳がある古墳群。本宿・郷土遺跡との関連が考えられる。	上毛古墳総覧.62
12 野上塩之入遺跡	○	○			○	○		旧石器石器、縄文時代・奈良・平安時代の住居跡。炭焼窯跡、中・近世土坑など。	20
13 小塚遺跡		○	○		○	○		縄文～弥生時代の住居跡、平安時代～中世の遺構検出。	50
14 稲荷森遺跡				○			○	方形周溝墓、近世の溝等。	45
15 生田遺跡				○				鑄川に向かう東斜面に位置する。縄文時代晩期深鉢形土器が出土している。	62
16 北山茶臼山西古墳				○				県内最古級の前方後方墳で、方形規矩鏡・変形四獣鏡を伴う。木棺直葬。	15
17 北山茶臼山西古墳				○				県内最古級で、神人竜虎画像鏡・底部穿孔盃型土器を伴う。4世紀後半築造。	61.62
18 中高瀬観音山遺跡		○	○	○	○	○		縄文～奈良・平安時代の住居跡。中世山城の曲輪、近世の庚申信仰跡など。	35
19 下高瀬寺山遺跡	○	○	○					縄文草創期石器、早期土坑。縄文・弥生・奈良時代の住居跡、土坑・集石遺構検出。	34
20 下高瀬上之原遺跡		○	○	○		○		古墳後期～平安時代の集落遺跡。水場の検出。埴輪窯跡、近世墓。縄文時代住居跡1軒。	31
21 下高瀬前田遺跡					○	○	○	奈良時代の住居跡、中世以降の墓・As-A下の畠。	34
22 内匠日向周地遺跡		○	○	○	○	○		縄文早期押型土器。縄文・古墳～平安時代の住居跡、中世・近世の土坑・水田や畠。	34
23 内匠日影周地遺跡		○	○	○	○	○		縄文～平安時代の住居跡。近世の土坑・溝・墓坑なども検出した複合集落遺跡。	23
24 内匠諏訪前遺跡		○	○	○				縄文時代と古墳時代後期の住居跡、近世の屋敷跡を検出。	23
25 内匠上之宿遺跡		○	○	○	○	○		縄文～古墳時代の住居跡22軒。中世の城郭跡(内匠城外堀・土塁)の調査。	26
26 富岡陣屋跡							○	現在の富岡製糸場にあつたとされる陣屋跡。	62
27 田篠中原遺跡		○						縄文中期の集落、敷石住居跡11軒・環状列石・屋外埋設土器12基、配石遺構36基など。	19
28 田篠上平遺跡				○	○	○		古墳3基、奈良・平安時代住居跡50軒、掘立柱建物23棟、As-B下水田、近世墓など。	18
29 原田篠遺跡				○	○	○		奈良平安時代の住居跡・土坑・溝。瓦の出土があり近隣に寺院跡の可能性あり。	63
30 上田篠古墳群				○				古墳時代後期の古墳群か。30数基が現存している。	63
31 坂詰遺跡		○	○	○	○	○		縄文時代土坑、古墳時代～平安時代住居跡、中世の掘立柱建物・井戸・溝など。	64
32 西原遺跡		○	○	○	○	○		古墳時代と奈良・平安時代の住居跡、土坑・掘立柱建物・溝。中世の塚1基。縄文包合層。	10
33 松葉慈学寺遺跡		○	○	○	○	○		弥生～平安時代住居跡83軒、縄文時代土坑など。有舌土頭器出土。	10
34 白倉上野遺跡			○	○				弥生時代後期から平安時代の住居跡293軒(弥生時代143軒、古墳時代122軒、奈良・平安時代28軒)の大規模集落。古墳時代前期の畿内系布留式土器小型甕が出土。	9
35 天王塚古墳				○				竪穴系の主体部(粘土槨)を持つと推定される古式の前方後円墳。	11
36 福島駒形遺跡			○	○				古墳1基、弥生～古墳時代の住居跡・掘立柱建物跡など。滑石工房跡を確認。	14
37 大山塚古墳				○				舟形石棺を伴う首長墓と思われる。詳細は不明。	11
38 庭谷代官所跡							○	鑄川の断崖と三方を堀でめぐらせた代官所跡。	11
39 法華経供養遺跡					○			県史跡、石像物を主とした法華経信仰の遺跡。	11
40 東吹上遺跡		○	○	○	○			縄文中期から奈良・平安時代までの複合集落・集落遺跡。	65
41 白倉下原・天引向原遺跡	○		○	○	○	○	○	A T下層よりナイフ型石器などの石器群の環状ブロック群が検出。弥生～平安時代の住居跡、古墳時代粘土採掘坑、寺院跡など。	32
42 天引狐崎遺跡	○	○	○	○				A T下層よりナイフ型石器、石器群の環状ブロック群が検出。弥生時代住居跡・古墳2基。	29.38
43 安坪古墳群				○				古墳時代後期の群集墳。長根安坪遺跡で15基調査された。	39
44 長根安坪遺跡		○	○	○	○			縄文住居跡12軒・弥生住居跡34軒・方形周溝墓14基・古墳15基・奈良～平安住居49軒・土坑145基など、複合集落。	39
45 西場脇遺跡		○						縄文早期田戸下層式土器出土。古墳・平安時代の住居跡、奈良時代遺物集中して出土。	56
46 佐久間遺跡				○				縄文時代住居跡・土坑、平安時代住居跡・土坑等。	66
47 神保富士塚遺跡	○	○	○	○	○	○		縄文・古墳・奈良～平安時代の住居跡。掘立柱建物・土坑なども検出した複合集落遺跡。	28
48 神保植松遺跡		○	○	○	○	○		縄文～平安時代住居跡。堀の城、井戸、方形周溝墓。縄文早期条痕文土器・板碑・五輪塔。	40
49 折茂東遺跡			○	○	○			弥生時代後期の住居跡・方形周溝墓、古墳時代の住居跡など。	53
50 神保古墳群				○				高崎市指定文化財。6～7世紀に比定。	上毛古墳総覧
51 壺I・II古墳群				○				古墳時代後期の古墳群。	上毛古墳総覧
52 神保下條遺跡				○	○			古墳5基、古墳～奈良時代住居跡、中世館跡。大量の埴輪・鏡・鉄器・ガラス玉出土。	27
53 多胡蛇黒遺跡		○		○				旧石器(石器・礫)、古墳時代後期～平安時代住居跡174軒、掘立柱建物、溝など。	22
54 川内遺跡		○	○	○	○			縄文時代土坑、弥生～平安時代に住居跡。弥生時代の方形周溝墓など。	55
55 矢田遺跡		○	○	○	○			旧石器・縄文草創期石器。縄文・古墳～平安時代の住居跡。「物部郷長」等の線刻紡錘車。	16
56 多比良追部野遺跡		○	○	○	○	○		旧石器石器類、縄文早期擦糸文土器出土。縄文・古墳平安時代の住居跡・平安時代水田、江戸期溜池など。	41
57 多比良平野遺跡		○		○	○	○		奈良・平安時代住居跡など。	30
58 入野遺跡		○						押型土器。縄文時代前期、古墳時代前期・後期の住居跡。中世の墓坑など。	52
59 多胡古墳群				○				古墳時代後期の古墳群。	上毛古墳総覧.22
60 南陽台窯跡群				○				本事業団職員が遺跡地を確認。	
61 黒熊遺跡群		○	○	○				縄文時代前・中期の住居跡、弥生時代の方形周溝墓、古墳時代から平安時代までの住居跡。	51
62 黒熊中西遺跡		○	○	○				古墳～平安時代住居跡、平安期礎石建物6棟・道7条・井戸・土坑。寺院跡関連遺物出土。	24
63 山の神古墳群				○				古墳時代後期の古墳群。	上毛古墳総覧
64 中ノ原古墳群				○				古墳時代後期の古墳群。	上毛古墳総覧
65 下反内窯跡					○			地下式無段無階登り窯と地下式無段登り窯の2基を調査。坏・甕・瓦などが出土。9～10世紀。	59
66 滝ノ前窯跡					○			「吉井町滝ノ前窯跡採集遺物とその性格(須田茂)」	群馬文化1998-10
67 下野金井窯跡					○			各調査地点から計16基の窯跡が調査された。8～10世紀の所産。	57
68 黒熊八幡遺跡		○	○	○	○	○		旧石器、縄文時代住居跡121軒・土坑154基、掘立柱・礎石建物、小鍛冶、水田址、墓坑。	42
69 黒熊栗崎遺跡				○	○	○		古墳時代埋設土器、奈良・平安時代住居跡・土坑・掘立柱建物・小鍛冶、神社跡など。	33
70 白石根岸遺跡				○	○	○		縄文時代住居跡、奈良・平安時代住居跡、中・近世の集石遺構、As-B軽石下水田址。	30
71 白石大御堂遺跡						○		大規模な中世寺院跡。埋葬遺構群が伴う。	21
72 竹沼遺跡					○			縄文中期の住居跡・土坑、古墳時代の住居跡と滑石製品工房跡など。	17
73 白石古墳群				○				古墳時代中期以降の前方後円墳と後期～終末期の古墳群。	上毛古墳総覧
74 山名古墳群				○				前方後円墳と群集墳で構成される。	上毛古墳総覧
75 末沢I・II窯跡					○			数基の窯跡が確認され、1基が調査された。8世紀前半代の蓋・坏・甕・瓦が出土。	59
76 馬山古墳群				○				鑄川右岸に広がる古墳群。古墳時代後期の群集墳か。	上毛古墳総覧

参考文献は 27・28頁に記した。※印の遺跡は図版外に位置している。

い。白倉下原・天引向原遺跡で検出したAs-A軽石を集めてうずたかく積んだ「灰搔き山」は、災害復興に対する農民の労苦に思いを寄せる資料である。内匠諏訪前遺跡、内匠日影周地遺跡、中沢平賀界戸遺跡(礎石建物)、黒熊八幡遺跡(近世から近代)では、近世屋敷跡が、多比良追部野遺跡では、炭窯や道路状遺構など多彩な遺構が検出された。

近世墓坑は、丘陵や台地など、集落域の縁辺部と考えられる場所から検出されることが多い。下高瀬上之原遺跡、下高瀬前田遺跡、中沢平賀界戸遺跡、白倉下原・天引向原遺跡があげられる。このうち、下高瀬前田遺跡では、天明3年銘の墓碑が確認されている。白倉下原・天引向原遺跡では、18基の墓坑の他、塚を検出したと報告されている。

本遺跡から検出した遺構は、As-A軽石降下後の災害復旧溝とAs-B下の水田の痕跡と溝、水田面に残るAs-B軽石を含む黒色混土を覆土とした耕作痕である。周辺の遺跡の様相から、この遺構を直接的に関連づけて考えられるものは少ない。また、出土遺物からも、本遺跡を浮き彫りにする資料は得られておらず、今後の調査の進展にゆだねざるを得ないところがある。しかしながら、本遺跡は鎚川流域の一地点であることにはかわりはなく、前述した歴史の変遷の中に位置づけられ、大きな歴史のうねりを共にしてきている。

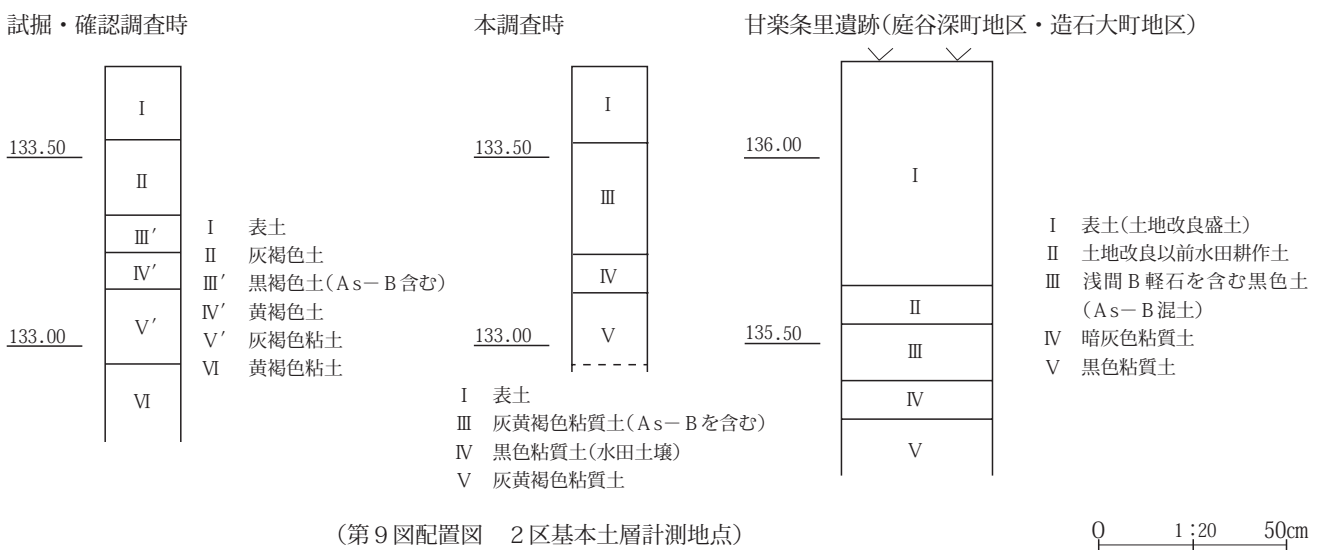
この後のまとめの項では、災害復旧溝や甘楽条里遺跡

の条里地割りや水利について現状の把握にもとづいてまとめていきたい。

7 遺跡の基本層序

本調査区近隣では、計3回ほど基本土層の確認がなされている。当事業団による甘楽条里遺跡(造石大町地区)の調査時(2008年)と今回調査の試掘・確認調査時および本調査時においてである。それぞれ色調や表現の違いが認められるが、基本的な土層の構成に差異は認められない。本遺跡地からは、浅間山火山噴出物のAs-B軽石、As-A軽石、及び榛名山関連の火山噴出物の純層は確認されていない。ここでは、すべての調査地点の基本土層を掲げ、資料化しておきたい。

Ⅲ層(灰黄褐色土)ないしⅢ'層は、いずれもAs-B軽石を多く含む土層で、本遺跡地の遺構確認面となる重要な基本層と言える。試掘調査を含め、すべての調査時に確認面として位置づけられている。本調査区では、表土直下にこの面があり、後述するAs-A軽石降下時の災害復旧溝をこの面で確認している。また、本調査区のⅢ層(灰黄褐色土)は、Ⅳ層とともに水田土壌を構成するものと考えられるが、Ⅲ層上面では、水田遺構の確認は困難であった。Ⅳ層上面において、畦畔や水田面の痕跡が認められている。Ⅴ層およびⅤ'層上面では遺構は確認されておらず、水性堆積の可能性が高い。



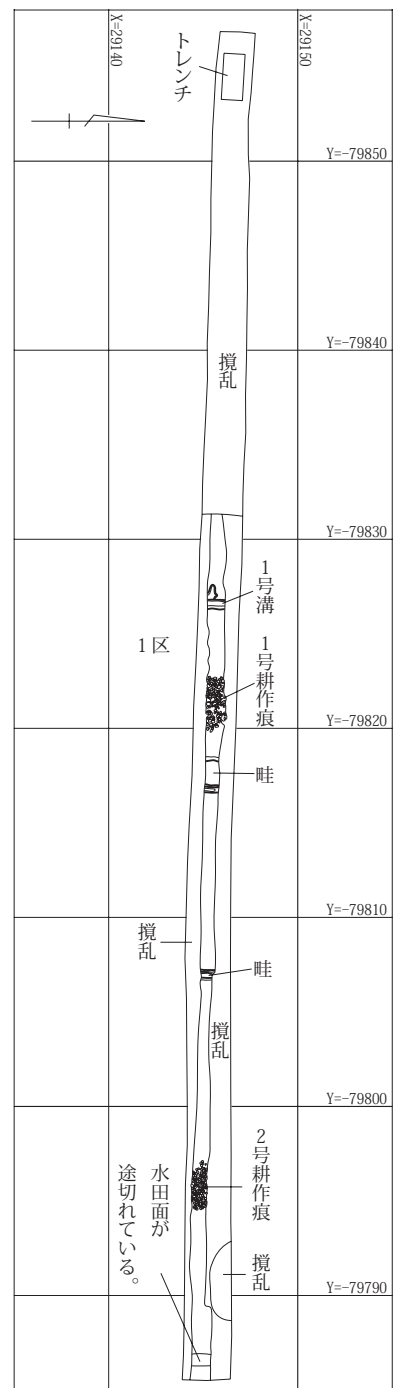
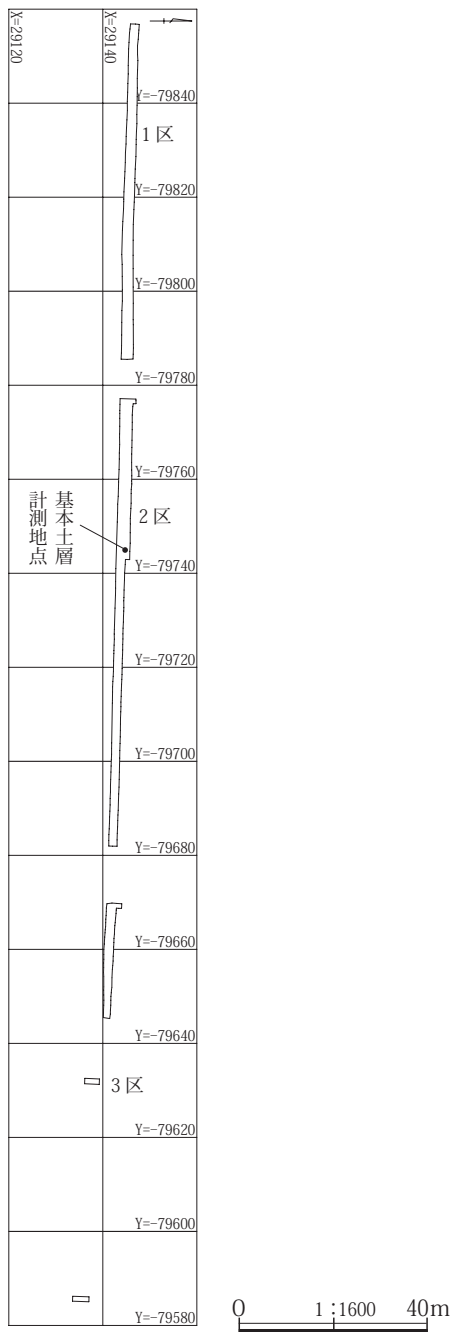
第8図 基本土層柱状図

第2章 検出された遺構と遺物

1 調査の概要

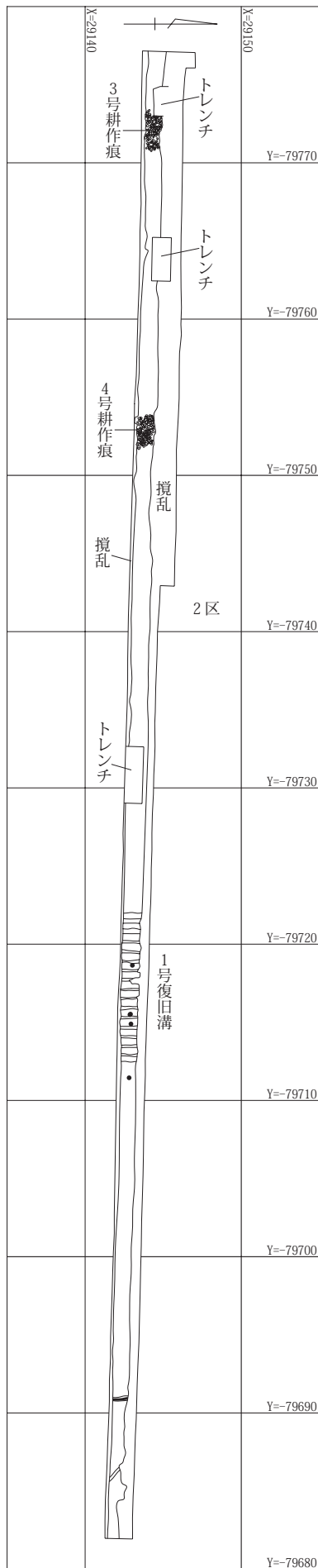
調査は表土除去後、調査区西側の1区からAs-B軽石混土の上面で、遺構の確認をはじめた。表土(現代耕作土)は、概ね40cm~50cmでAs-B軽石混土(灰黄褐色土:Ⅲ層)上面まで達する。精査・確認の結果、2区より多量のAs-A軽石を含む多数の溝状遺構(災害復旧

溝)が確認された。その他の遺構は確認できなかったため、As-B軽石混土(灰黄褐色土)の除去作業をはじめた。1区・2区では、水田面と推定できる面が確認されたが、明瞭な畦畔等の検出には至らなかった。As-B軽石混土(灰黄褐色土)を精査した結果、1区・2区・3区からは、無数の耕作痕と溝1条が検出された。3区では、攪乱や耕作痕のため、水田面は確認できなかった。

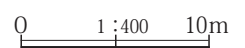
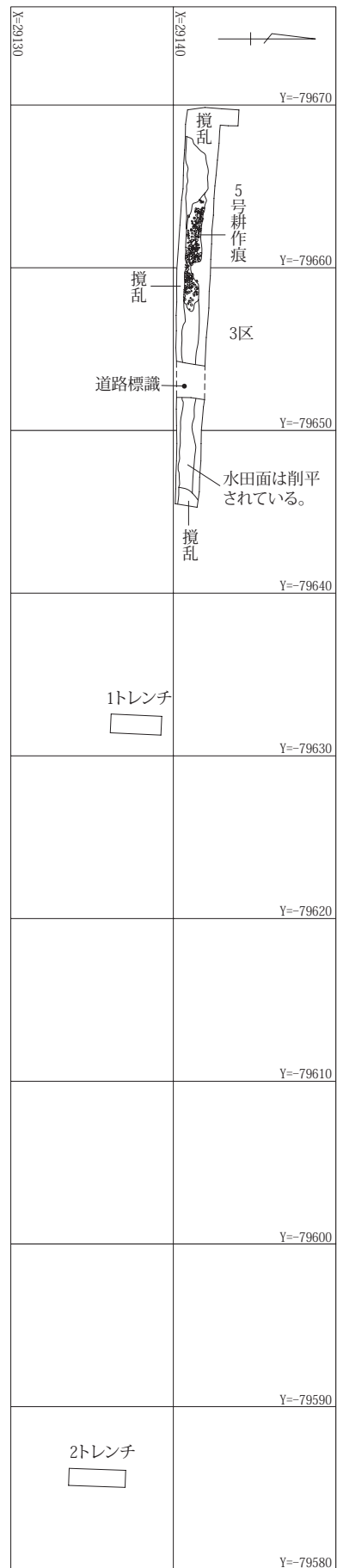


1 区

2 区



3 区



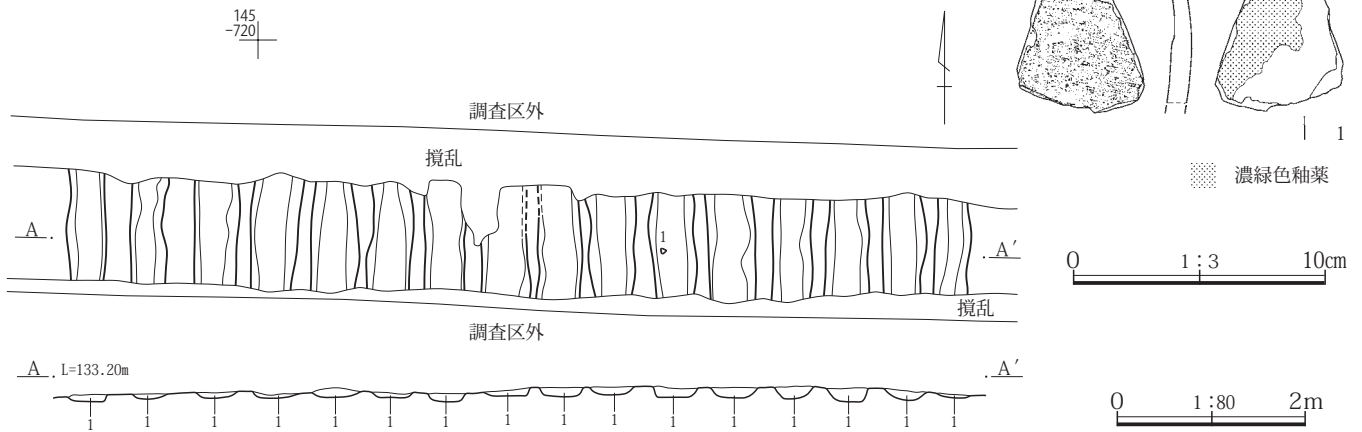
第10図 2・3区全体図

2 災害復旧溝

表土除去後、2区より16条の溝が検出された。幅40cm～50cm、深さ10cmを計り、南北方向に列をなしている。

覆土には、As-A軽石が人為的に充填されたと考えられることから、天明3年(1783年)浅間山の火山噴火に伴う災害に対して、耕地を復旧させるため、除去したAs-A軽石を埋め戻した災害復旧溝とみられる。

2区1号復旧溝



2区1号復旧溝

1 As-A層 わずかに黄褐色粘質土ブロックを含む

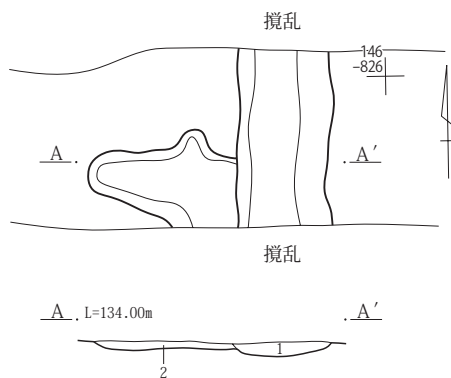
第11図 1号復旧溝と出土遺物

3 溝

1区のほぼ中央部より検出された。幅50cmのU字状の

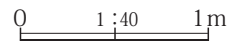
断面をもち、深さ7cmを計る。南北に走行し、覆土中にAs-B軽石やAs-A軽石が含まれる。近世までの使用が考えられる。

1区1号溝



1区1号溝

1 にぶい黄褐色土 5/3 極小軽石を3%含む やや粘質あり
2 灰黄褐色土 5/2 極小軽石を2%含む しまりあり 粘質あり
所々に粘質ブロックあり



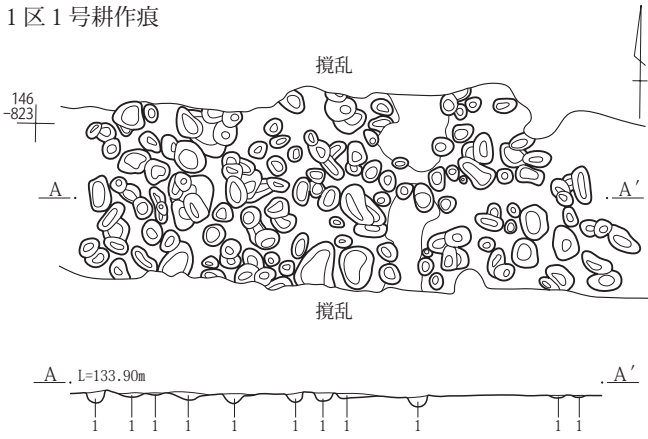
第12図 1号溝

4 耕作痕

1区から3区まで合計5地点で人為的な掘り込みを検出した。いずれの地点からも円形もしくは楕円形の平面形をしたφ5～20cmの不定形の形状をした掘り込みが、一定の範囲の中で集中して検出された。As-B軽石が

多量に含まれており、As-B軽石降下後の所産と考えられる。平面形・断面形ともに丸みを帯び、鋭利な工具痕のような痕跡は確認できなかった。また、形状とともにその並びなども不規則で重複している部分もあり、一時に集中しておこなわれた作業の痕跡といえる。

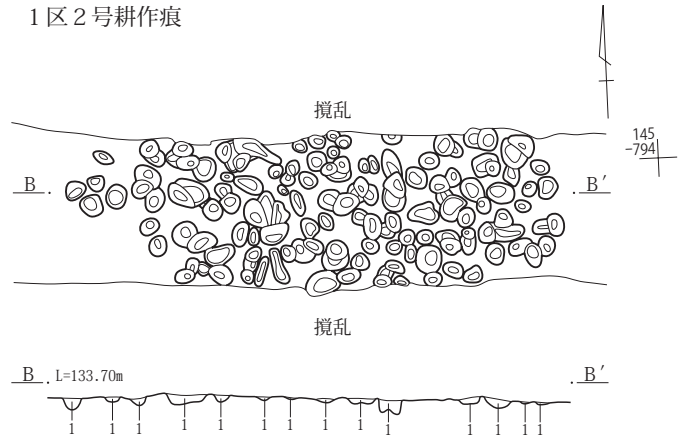
1区1号耕作痕



1区1号耕作痕

1 にぶい黄褐色土 5/3 As-B軽石を大量に含む混土 ややもろい70%
ややしまりあり30%程度

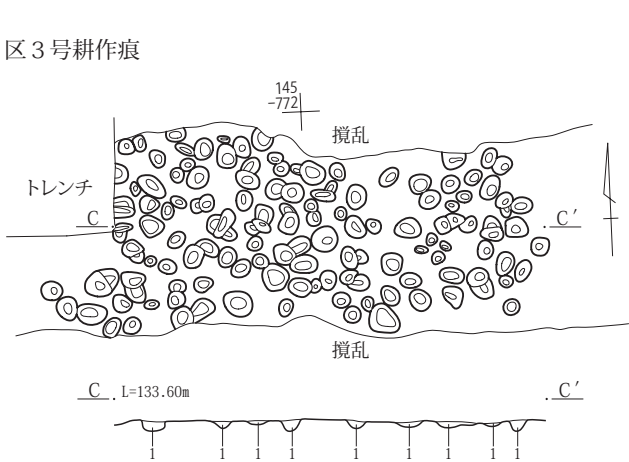
1区2号耕作痕



1区2号耕作痕

1 にぶい黄褐色土 5/3 As-B軽石を大量に含む混土 ややもろい70%
ややしまりあり30%程度

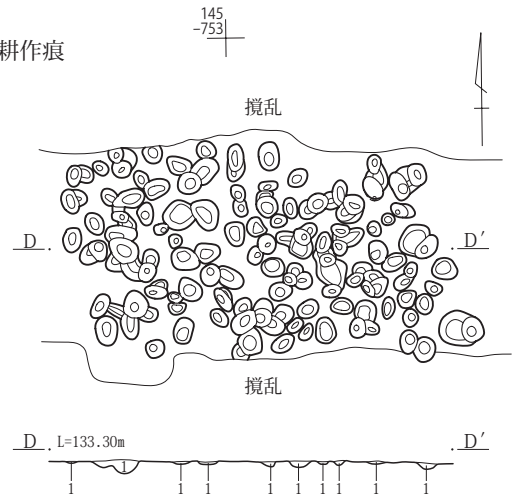
2区3号耕作痕



2区3号耕作痕

1 灰黄褐色土 4/2 As-B軽石を大量に含む混土 ややしまりあり70%
程度 所々ややもろい30%

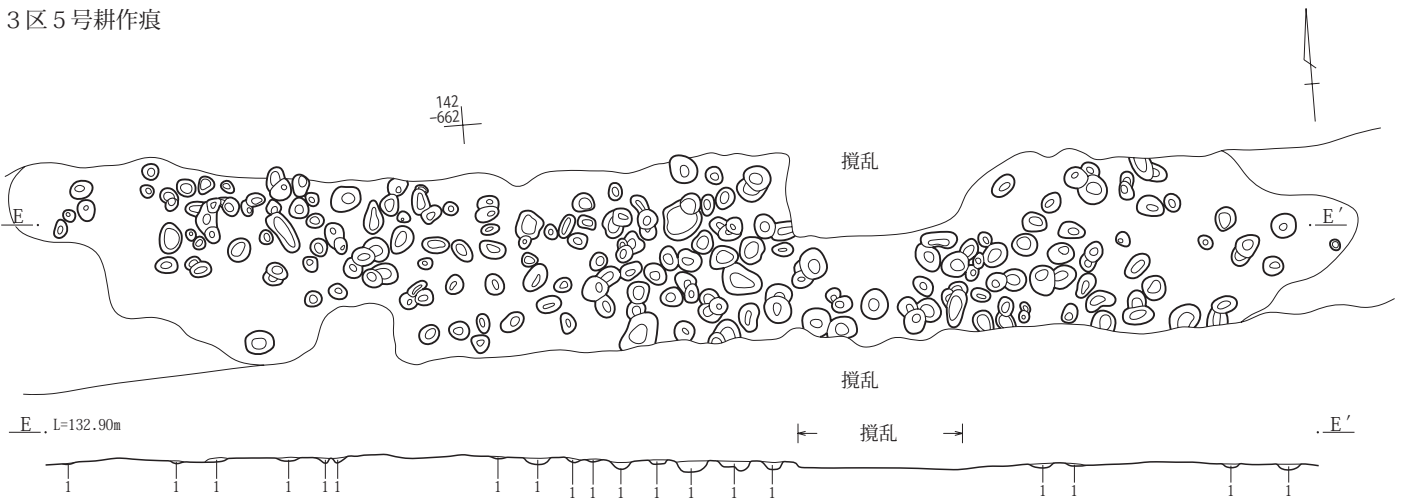
2区4号耕作痕



2区4号耕作痕

1 灰黄褐色土 4/2 As-B軽石を大量に含む混土 ややしまりあり70%
程度 所々ややもろい30%

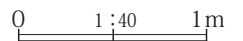
3区5号耕作痕



3区5号耕作痕

1 灰黄褐色土 6/2 As-B軽石を大量に含む ややしまりあり

第13図 1～5号耕作痕



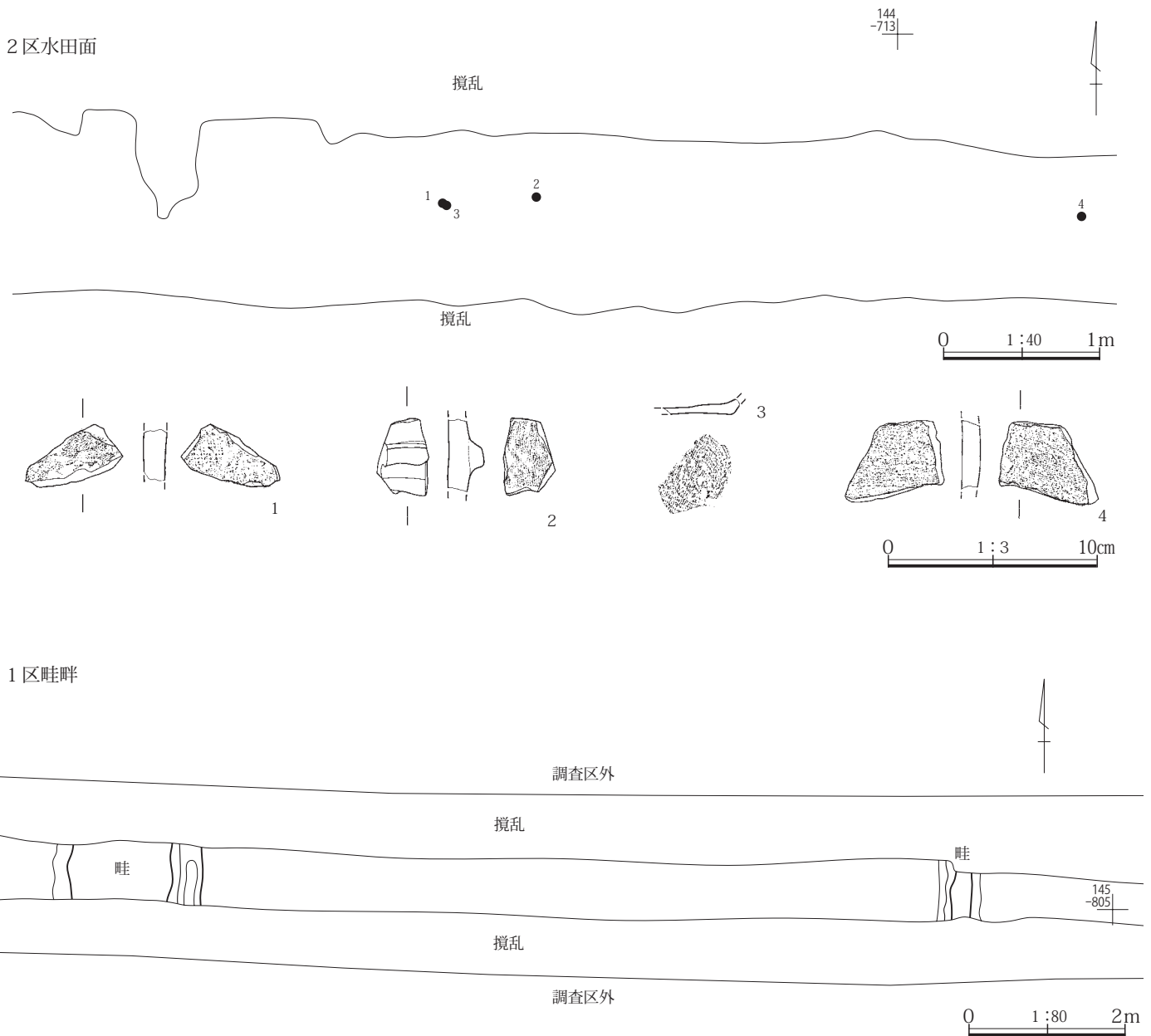
5 水田面・畦畔

調査区(1～3区)すべてでAs-B軽石混土層(Ⅲ層)とその下層(Ⅳ層)は確認できたが、3区では攪乱や耕作痕によって水田面としての確認はできなかった。

1区および2区からは、As-B軽石混土層を取り除くと、Ⅳ層上面で水田面の面的な広がりが確認できた。1区では、水田面の色調と硬さに差異が認められる列を確認した。黒色粘質土(水田面)を仕切るように、幅30cm～50cmの硬くしまる暗褐色土が列をなしていた。この列状の痕跡については、畦畔の可能性が高い。水田面は、一様に平坦な面を構成している。調査範囲がせまく、等高

線を設定することは困難であったが、西側から東側に向かって下がっていく傾向にある。2区の北側に隣接する甘楽条里遺跡(造石大町地区)の調査でも、東側に傾斜して下がるのが確認されており、同様の傾向にあると言える。甘楽条里遺跡(造石大町地区)との遺構の関連性を求めたが、本調査地点が条里地割りの東西方向に走行する坪の辺(境界線上)にあたり、道路路盤工事の影響も多く、関連づけることは困難であった。

1区では、水田部分が途切れている部分も確認され、列状の痕跡とともに南北方向に軸を持つことから、これらを畦畔の痕跡と考えている。



第14図 水田面と出土遺物(上)と畦畔(下)

6 出土遺物

出土遺物は少なく、合計8点が出土したのみである。検出遺構と直接的に関連を推し量れる遺物はなく、いずれも小片であった。

災害復旧溝覆土で1点、水田面のAs-B軽石混土層

内から4点、一括遺物が3点出土している。災害復旧溝出土の第11図1は、外面に濃緑色の釉薬が付着する陶器壺片と思われるものである。水田面のAs-B軽石混土出土の第14図1・2は、いずれも埴輪片で、1は内面にハケ目、2は凸帯が貼付されている。第14図3は須恵器杯底部片で回転糸切りが施され、4は須恵器甕の胴部片である。

第2表 遺物観察表

2区1号復旧溝

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第11図 PL.12	1	陶器 壺	覆土 胴部片	長 厚	5.3 0.8		細砂粒/還元焰/灰 褐	ロクロ整形。外面に濃緑色の釉薬が付着。	

2区水田面

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第14図 PL.12	1	埴輪か 不明	覆土 破片	長 厚	2.3 1.2		細砂粒/良好/浅黄 橙	外面はナデ、内面は縦・横ハケ目か。円窓か。	
第14図 PL.12	2	埴輪 円筒	覆土 凸帯片	長 厚	3.5 0.9		細砂粒/良好/浅黄 橙	凸帯貼付。外面はナデ、内面は器面磨滅のため不明。	
第14図 PL.12	3	須恵器 杯	覆土 底部片	高 厚	0.7 0.5		細砂粒/良好/浅黄 橙	ロクロ整形、回転糸回りか。底部は回転糸切り無調整。	
第14図 PL.12	4	須恵器 甕	覆土 胴部片	長 厚	3.8 0.8		細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形。内外面ともヘラナデか。	

2区遺構外

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
PL.12	1	土師器か 不明	2区覆土 破片					磨滅著しい。	写真のみ。
PL.12	2	土師器か 不明	2区覆土 破片					磨滅著しい。	写真のみ。
PL.12	3	土師器か 不明	2区覆土 破片					磨滅著しい。	写真のみ。

7 まとめ(調査の成果)

本遺跡(本調査区)は、その調査範囲がせまい上、検出された遺構・遺物も少ない。このため、本遺跡から検出した遺構・遺物の特徴から、その成果をまとめ、課題を提示することには限界があると考えている。しかしながら、遺構・遺物が検出した背景には、必ず人々の営為が存在している。そうした観点から、検出された遺構・遺物について、考えられることを列記して、本報告書のまとめとしたい。

① 災害復旧溝

浅間山の天明3年の噴火によって堆積した火山灰は、いうまでもなく無機質で耕作土として利用できるものではない。耕作者たちの手立てとしては、堆積した下位の耕作土を利用するしかなく、溝状に掘削して、利用する

耕作土を掘り出し、溝中にAs-A軽石を充填したものがこの災害復旧溝である。甘楽条里遺跡の他の調査地点(甘楽町遺跡調査会 平成9・10年度調査)でも同様の災害復旧溝(A軽石処理溝と報告)が確認されている。

また、他の甘楽条里遺跡地内(甘楽町教育委員会調査分)では、As-A軽石下から畑・水田面と畦畔・溝などが検出されている一方、復旧されることなく耕作放棄地になっている場合などもあり、深刻な被害が遺跡地周辺に広がっていたことが推測できる。天明3年の浅間山の噴火災害は、広範囲に及んでいたようで、関東地方一円にその被害は、土石流被害とともに各地で確認されている。

関越自動車道(上越線)関連の発掘調査でも白倉下原・天引向原遺跡ではうずたかく積んだ「灰搔き山」の下から畑が検出されたほか、下高瀬前田遺跡で畑、内匠日向

周地遺跡で水田が検出されている。浅間山の降灰被害は、鎗川流域では畑作・水田耕作におよび、やむなく耕作放棄することを余儀なくされた田畑もあったようである。「灰搔き山」や災害復旧溝は、人々の災害復旧の熱意の表れで、村落共同体による組織的な取り組みや耕作者個人の働きであつたりすると思われるが、生活者としての切実な課題として取り組まざるを得ない状況であつたことはいままでもない。

② 溝

1区から検出されたのみで、調査範囲がせまく、形状や覆土等からもその性格について言及できることは少ない。南北方向に軸を持つが、条里地割りと関連性については、地割りに平行している可能性があるということのみである。人為的であることには間違いないが、おそらく、耕作に関わった、水利の性格を有すものと思われる。

③ 耕作痕

すべての調査区の5地点から検出している。いずれも不定形の円形状を呈し、覆土中にAs-B軽石が含まれているため、As-B軽石降下後の所産である。残念ながら、道具の特定は難しいが、一般的な理解をすれば、鋤・鍬によるものと考えられる。また、耕作痕を見る限り、水平方向からの痕跡というよりは、むしろ垂直方向からの痕跡ととれるので、農地を耕起する際に使われていた「踏鍬」と呼ばれる鋤の一種である可能性が高い。この「踏鍬」は、今日のスコップのような使い方をするもので、耕地に垂直方向に突き立てて挿入し、土壌をはね起こす道具であるが、そうした作業の際にできた作業痕の可能性が高い。いずれにしても、収穫時の作業痕というよりも、耕地作業の上での作業痕と考えて差し支えないだろう。

④ 水田面・畦畔

すべての調査区から、As-B下の水田面と考えられる面(水田土壌)が検出している。このうち、3区は攪乱や耕作痕などの後世の人為的な掘削が及んでいるため、面としてはほとんど確認できておらず、水利関係の遺構も検出されなかった。

1区、2区ともに調査区の南北がそれぞれ攪乱されているため、幅1m前後しか水田面を確認することができなかった。そのため、水田面の全体像を把握できず、畦畔なども推定の域を出ないものとなった。検出された

As-B下の畦畔は、現行残存地割りにほぼ平行するものであり、隣接する甘楽条里遺跡(造石大町地区)の検出畦畔と同様のものである。全体としては、東に向かって段差があるものの、方格地割りの水田のアゼであつた可能性が高い。

これまでに調査された甘楽条里遺跡の調査内容を概観すると、古代の条里制を裏付けるような遺構の検出はなく、本調査区でも同様である。そこで、As-B下水田の様相から、中世段階の条里を考えることになるが、いずれの調査区(甘楽町教育委員会・甘楽町遺跡調査会、当事業団の調査)でも、調査地点が大畦畔の存在を想定できる位置でないという制約や調査範囲も限られており、一町四方の地割りとして畦畔を確認できていない状況である。また、As-B軽石下の畦畔・水口・溝などが検出されているが、それらは条里地割りに沿ったものと自然地形に沿ったものの両者があり、一様でない。例えば、甘楽町教育委員会の調査地区では、As-B軽石直下の水田が調査されており、検出した畦畔・溝等は条里地割りに沿ったものではなく、直接条里水田に結びつけて考えることはできない。

いずれにしても、今後の調査の進展を待つことになるが、甘楽条里遺跡そのものが現在でも条里型地割りの水田耕作地として、耕作され続けているという事実の重さは、その初源を究明してこそ一層意義あるものになると考えている。

⑤ 出土遺物

出土した遺物からは、遺構の性格を限定できるものはない。これらの遺物は、きわめて近い位置から混入したものと考えられるが、そうした遺構は確認されていないため、検討を要する。

出土遺物のうち、一般的には集落遺跡から出土することが多い遺物として、中世陶器破片(第11図1)や須恵器片(第14図3・4)がある。本調査区の近隣では、今のところ集落遺跡やこうした遺物を出土するような関連遺構の調査は実施されていない。考えられることとしては、調査区位置図(第2図)でもわかるように調査区のすぐ東側には、向井地区の集落がある。この集落は、北側の田中地区と連なる集落で、舌状の広がりを見せている。このあたりは、条里地割りが途切れる一帯で、条里地割りの東端部にあたる。北側から突き出した形の集落は、舌

状の微高地の上に形成しているものと考えられ、この微高地の東・西側は、低地が広がり、今日でも水田耕作されている土地でもある。このように、調査区の東側には微高地が存在し、そこには平安時代から中世にかけての集落の存在が想定でき、当該期の遺物が本遺跡(調査区)にもたらされた可能性がある。

第14図1・2に示した出土遺物は、いずれも円筒埴輪片である。円筒埴輪の出土する遺構としては、古墳(墳墓)または埴輪窯跡が考えられる。現存または記録に残る古墳としては、最も近くにあるものが北東方向600mの高崎市吉井町片山にある古墳群である。これらの古墳は、本調査区の下流域にあたり、自然流路による混入は考えられず、近隣の古墳時代の遺跡(森西遺跡)も北側500mのため、遺物の混入を想定するには無理がある。また、近隣に埴輪窯跡を想定することも容易ではなく、考える手立てが乏しいものになってしまう。しかし、古墳時代後期の鵜川流域では、その右岸に群集墳が形成され、先述の吉井町片山の古墳群もそれにあたる。こうした背景をもとに、本調査地近辺での古墳の存在を全く否定することはできないだろう。そのような前提のもとで考えると、条里地割りの開削時まで、古墳が存在したということになる。

条里地割りへの開削時期が群集墳形成後という前提で考えてみると、230haもの広大な面積を持つ遺跡地を条里地割りに則って開削していくには、組織力・経済力・労働力と一定の時間が必要であったことは間違いない。自然流路の改変工事はもとより、水田耕作を可能とする土地の改良(平坦面への改良)など優れた土木技術のもとに進められたと考えられ、先の向井地区の微高地もその対象になるであろう。とりわけ、遺跡地東側の低地部分は、甘楽条里遺跡の重要な水系である白倉川の旧流路またはその支流にあたると考えられ、それらの掘削工事が

この地にも及んだものと考えても差し支えない。いずれにしても、推論ということであるので、今後の調査の進展を期待するとともに、新たな知見を求めていくこととしたい。

⑥ 終わりに

報告書作成の中で、疑問に思うことがあったので、紙面を借りて明記しておきたい。

甘楽条里遺跡は、水田耕作適地として開発され、整然とした条里地割りのもとに、水田耕作がおこなわれてきており、今日においても水田耕作が営まれ続けている。少なくとも平安時代にまで営農の歴史をさかのぼることができるので、水田耕作が継承され続けているといえる。そうした水田耕作適地であり、社会的な要請のもとにあった「条里水田の地」であるにもかかわらず、天明3年の火山災害時の災害復旧溝やAs-B軽石降下後の耕作痕(水田耕作のための作業痕とは考えられない)といった畑作に関係した遺構が検出されているのである。また、甘楽町教育委員会による第3調査地点や第10調査地点でも、As-A軽石下から畝状遺構が多数検出し、条里地割り内で畑作が一般的におこなわれていたようである。現在では、こうした水田から畑地への転用は、農業施策の中で起こりうることであるが、中世と近世の質的な違いはあるにせよ、その要因はどのようなものなのだろうか。

水田耕作と畑作を見た場合、古くから米は租税としての位置づけがあるのに対し、畑作(主にイモ類・マメ類)はもっぱら日常的な食糧自給に重きを置いているものである。水田耕作に経済的な原理だけを捉えて考えただけでは、こうした疑問に答えることは難しく思えてならない。政治・経済的視点のみならず、人々の生活全般を究明するためには、民俗学などの視点を取り入れて、多角的・多面的に捉えることが重要ではないだろうか。

注および引用参考文献

- 注1 本図は、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第263集「甘楽条里遺跡(大山前地区)福島椿森遺跡」2000 第4章考古学的にみた甘楽条里遺跡(大山前地区)の耕地変遷 第44図にエレベーションを挿入した図である。
- 注2 能登 健、田中 雄 2000 注1の調査報告書 第4章考古学的にみた甘楽条里遺跡(大山前地区)の耕地変遷
- 1 国土交通省関東地方整備局 高崎河川国道事務所 烏・神流川河川維持管理計画 2012
 - 2 群馬県甘楽郡甘楽町公式ホームページ
 - 3 甘楽町教育委員会 「青木畑Ⅰ・Ⅱ 中橋遺跡」1983
 - 4 甘楽町教育委員会 「甘楽条里遺跡 埋蔵文化財調査報告書 第2集」1984
 - 5 甘楽町教育委員会 「甘楽条里遺跡 埋蔵文化財調査報告書 第3集」1985
 - 6 甘楽町教育委員会 「甘楽条里遺跡 埋蔵文化財調査報告書 第4集」1986
 - 7 甘楽町教育委員会 「甘楽条里遺跡 埋蔵文化財調査報告書 第6集」1989

第2章 検出された遺構と遺物

- 8 甘楽町遺跡調査会 「甘楽条里遺跡 埋蔵文化財調査報告書」1998
- 9 甘楽町教育委員会 「白倉上野遺跡(下小塚V遺跡)」2014
- 10 甘楽町教育委員会 「天神Ⅰ・Ⅱ遺跡、西原遺跡、松葉慈学寺遺跡」1995
- 11 甘楽町役場 「甘楽町史」1980
- 12 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 「甘楽条里遺跡(大山前地区)福島椿森遺跡」2000
- 13 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 「甘楽条里遺跡(庭谷深町地区)・(造石大町地区)塚田遺跡・田島遺跡」2009
- 14 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 「田篠塚原遺跡・福島駒形遺跡・福島鹿嶋下遺跡・福島椿森遺跡」1998
- 15 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 「大島上城、北山茶白山古墳」1989
- 16 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 「矢田遺跡、Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ・Ⅷ」1990～1998
- 17 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 「緑埜遺跡群、緑埜上郷遺跡、竹沼遺跡」1997
- 18 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 「田篠上平遺跡」1989
- 19 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 「田篠中原遺跡」1991
- 20 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 「野上塩之入遺跡・塩之入城遺跡」1991
- 21 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 「白石大御堂遺跡」1992
- 22 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 「神保下條遺跡」1992
- 23 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 「内匠諏訪前遺跡、内匠日影周地遺跡」1992
- 24 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 「黒熊中西遺跡(1)(2)」1992、1994
- 25 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 「南蛇井増光寺遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ」1993～1999
- 26 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 「内匠上之宿遺跡」1993
- 27 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 「多胡蛇黒遺跡」1993
- 28 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 「神保富士塚遺跡」1993
- 29 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 「天引狐崎遺跡Ⅰ旧石器時代編」1994
- 30 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 「多比良平野遺跡、白石根岸遺跡」1994
- 31 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 「下高瀬上之原遺跡」1995
- 32 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 「白倉下原・天引向原遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ」1994～1999
- 33 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 「黒熊栗崎遺跡」1995
- 34 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 「内匠日向周地遺跡、下高瀬寺山遺跡、下高瀬前田遺跡」1996
- 35 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 「中高瀬観音山遺跡」1996
- 36 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 「上栗須寺前遺跡Ⅰ・Ⅱ」1996
- 37 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 「中沢平賀界戸遺跡」1997
- 38 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 「天引狐崎遺跡Ⅱ」1997
- 39 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 「長根安坪遺跡」1997
- 40 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 「神保植松遺跡」1997
- 41 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 「多比良追部野遺跡」1997
- 42 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 「黒熊八幡遺跡」1998
- 43 富岡市教育委員会 「上ノ宿・千足遺跡」1998
- 44 富岡市教育委員会 「前畑遺跡、内出Ⅰ遺跡、丹生城西遺跡、五分一遺跡」1993
- 45 富岡市教育委員会 「稲荷森遺跡発掘調査報告書」1981
- 46 富岡市教育委員会 「本宿・郷土遺跡発掘調査報告書」1982
- 47 富岡市教育委員会 「内匠遺跡発掘調査報告書」1985
- 48 富岡市教育委員会 「横瀬古墳群」1991
- 49 富岡市教育委員会 「芝宮古墳群」1992
- 50 富岡市教育委員会 「小塚遺跡Ⅱ」1999
- 51 吉井町教育委員会 「黒熊遺跡群発掘調査報告書(1)(2)(3)(4)(5)」1982・1985
- 52 吉井町教育委員会 「入野遺跡Ⅱ・Ⅲ」1962・1988
- 53 吉井町教育委員会 「東沢遺跡、折茂東遺跡」1988
- 54 吉井町教育委員会 「富岡遺跡」1989
- 55 吉井町教育委員会 「川内遺跡発掘調査報告書」1982
- 56 吉井町教育委員会 「西場脇・長根宿遺跡」1987
- 57 藤岡市教育委員会 「下日野金井窯跡群・金山下古墳群」2005
- 58 吉井町誌編さん委員会 「吉井町誌」1974
- 59 国土館大学文学部考古学研究室発掘調査報告書 「下五反田窯跡・末沢窯跡」1984
- 60 下仁田町遺跡調査会 「下鎌田遺跡」1998
- 61 群馬県 「群馬県史」1981
- 62 富岡市 「富岡市史 自然編、原始・古代・中世編」1987
- 63 富岡市教育委員会 「上田篠古墳群・原田篠遺跡」1984 「原田篠遺跡」1998
- 64 富岡市教育委員会 「新井・坂詰遺跡」1990
- 65 群馬県立博物館研究報告 「東吹上遺跡」1973
- 66 甘楽町遺跡調査会 「佐久間遺跡発掘調査報告書」1988
- 67 下仁田町遺跡調査会 「観音寺原遺跡調査報告書」1996

写真図版



1 1区調査前風景(東から)



2 1区全景(東から)



1 1区確認面(東から)



2 1区確認面東側(東から)



3 1区確認面東側(南から)



4 1区中央部トレンチ南半分(東から)



5 1区中央部トレンチ全景(北から)



1 1区中央部トレンチ北半分(東から)



2 1区西端部トレンチ(南から)



3 1区西端部トレンチ(南から)



4 1区西端部トレンチ(南から)



5 2区調査区全景(東から)

PL.4



1 2区調査区東半分(東から)



2 2区調査区西半分全景(東から)



3 2区調査区全景(東から)



4 2区調査区西半分(東から)



5 3区調査区全景(西から)



1 3区1トレンチ調査状況全景(西から)



2 3区2トレンチ調査状況(西から)



3 1区1号溝全景(南から)



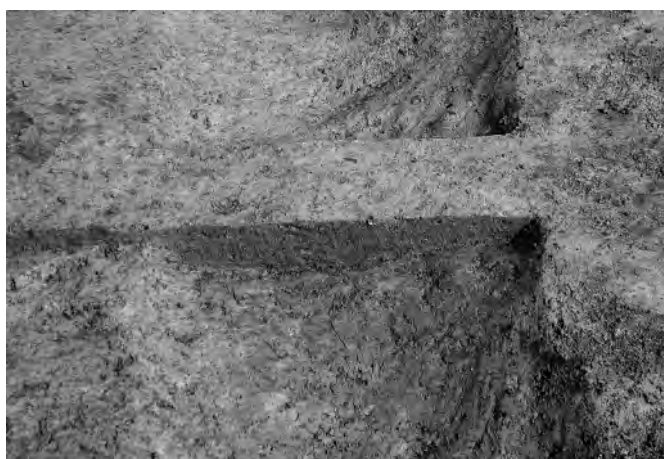
4 1区1号溝全景(南西から)



5 1区1号溝断面(南から)



7 2区1号復旧溝全景(東から)



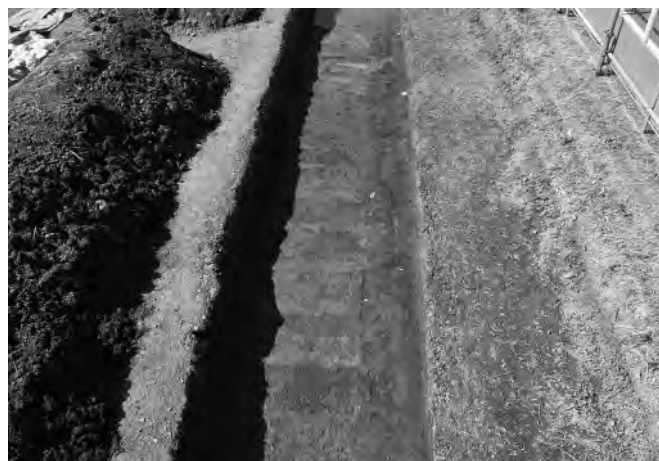
6 1区1号溝東半分断面(南から)



1 2区1号復旧溝西部分(南東から)



2 2区1号復旧溝(東から)



3 2区1号復旧溝確認面(東から)



4 2区1号復旧溝検出面(北東から)



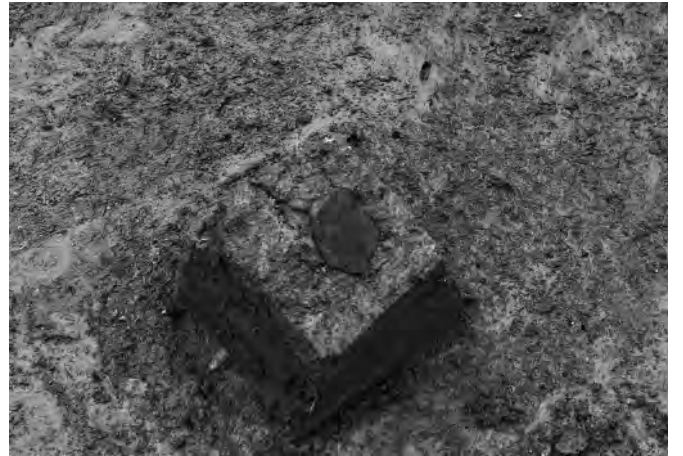
5 2区1号復旧溝断面(南東から)



1 2区水田面遺物出土状態(東から)



2 2区水田面出土遺物4(南から)



3 2区水田面出土遺物2(南から)



4 2区水田面中央部確認面(東から)



5 2区水田面西端確認面(南東から)



6 2区水田面中央部確認面(南東から)



7 2区水田面中央部確認面(南東から)



1 1区1号耕作痕全景(南から)



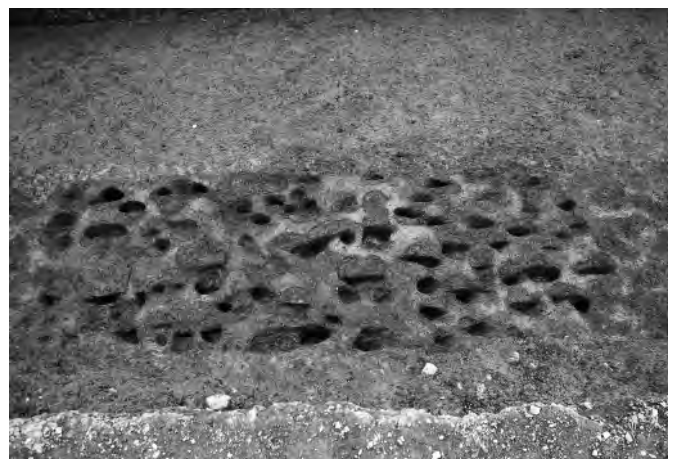
2 1区1号耕作痕断面(南から)



3 1区1号耕作痕近景1(南から)



4 1区1号耕作痕近景2(南から)



5 1区2号耕作痕断面(南から)



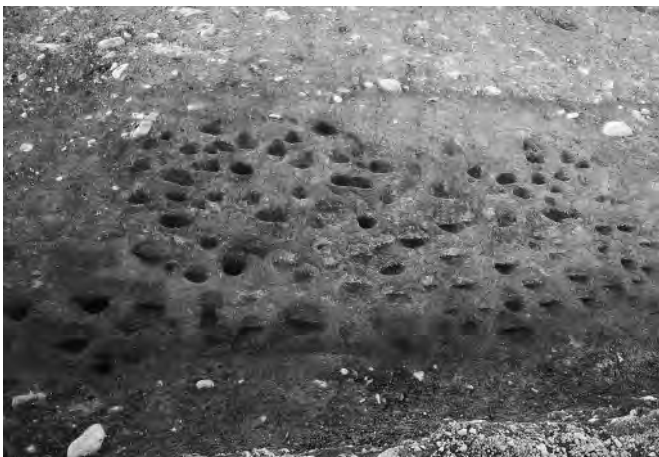
1 1区2号耕作痕全景(南から)



2 1区2号耕作痕近景1(南から)



3 1区2号耕作痕近景2(北から)



4 2区3号耕作痕断面(南から)



5 2区3号耕作痕近景1(南から)



1 2区3号耕作痕全景(南から)



2 2区3号耕作痕近景2(北から)



3 2区4号耕作痕断面(北から)



4 2区4号耕作痕近景1(南から)



5 2区4号耕作痕近景2(南から)



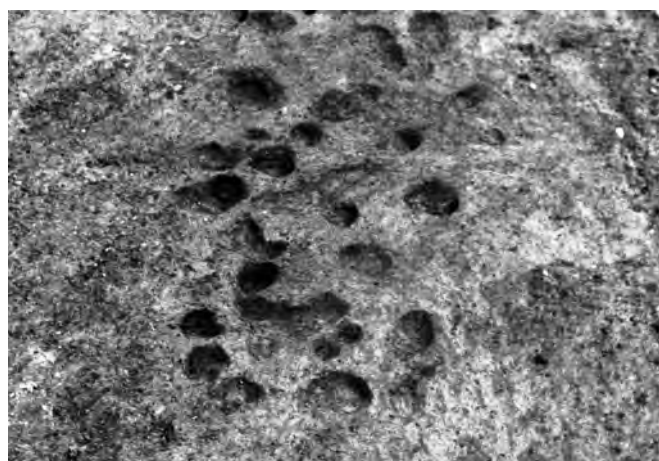
1 2区4号耕作痕全景(南から)



3 3区5号耕作痕中央部(西から)



2 3区5号耕作痕全景(西から)



4 3区5号耕作痕近景(西から)



1 1区調査開始風景(西から)



2 1区1号溝測量風景(西から)



3 1区水田面調査風景(北東から)

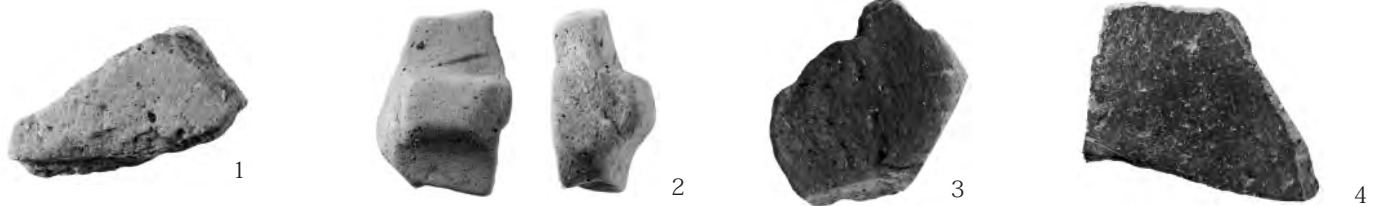


4 2区耕作痕調査風景(南から)

1号復旧溝



水田面



遺構外出土遺物



報 告 書 抄 録

書名ふりがな	かんらじょうりいせき（つくりいしむかい・つくりいしおおまち・つくりいししもまちちく）
書 名	甘楽条里遺跡（造石向井・造石大町・造石下町地区）
副書名	平成26年度社会資本総合整備事業（活力創出基盤整備）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻 次	
シリーズ名	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	603集
編著者名	飛田野正佳
編集機関	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	20150715
作成法人ID	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住 所	群馬県渋川市北橘町下箱田784-2
遺跡名ふりがな	かんらじょうりいせき（つくりいしむかい・つくりいしおおまち・つくりいししもまちちく）
遺跡名	甘楽条里遺跡（造石向井・造石大町・造石下町地区）
所在地ふりがな	ぐんまけんかんらぐんかんらまちつくりいしちない
遺跡所在地	群馬県甘楽郡甘楽町造石地内
市町村コード	10384
遺跡番号	0001
北緯（世界測地系）	361533
東経（世界測地系）	1385645
調査期間	20141001-20141031
調査面積	1,564㎡
調査原因	道路建設
種 別	生産跡
主な時代	平安/中・近世
遺跡概要	生産跡-平安-水田跡/生産跡-中・近世-溝1-耕作痕5/生産跡-近世-災害復旧溝群
特記事項	水田跡、耕作痕、災害復旧溝を調査した。
要 約	甘楽条里遺跡は今日まで条里地割りを残す遺跡である。調査面積が狭少であるが、As-B軽石混土層下から、水田面・畦畔と考えられる遺構の他、中・近世の溝や耕作痕、近世のAs-A軽石降下後の災害復旧溝を検出した。

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第603集

甘楽条里遺跡(造石向井・造石大町・造石下町地区)

平成26年度社会資本総合整備事業(活力創出基盤整備)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成27(2015)年7月10日 印刷

平成27(2015)年7月15日 発行

編集・発行／公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377-8555 群馬県渋川市北橘町下箱田784番地2

電話(0279)52-2511(代表)

ホームページアドレス <http://www.gunmaibun.org/>

印刷／川島美術印刷株式会社

付図 甘楽条里遺跡(造石向井・造石大町・造石下町地区)

甘楽条里遺跡の発掘調査区 甘楽町図 No 1・2・3・4 1/2500使用

